墨子の書にいにしへ聖主の埋葬の制棺三寸と見ゆ周尺の一寸は今の曲尺の七分餘に當れは孔子の四寸は曲尺の三寸にちかく墨子の三寸は曲尺の二寸に餘れり今棺を造るにこれ等の度に合ひぬる材を用ひんこと孝子の心に恢くおもふ所なるへけれど初喪に於てはたやすく求め得かたかるへし又木を得て新たに挽わらせなとせむには徒らにひまとるへくかつ新たにわりたる木はその心おほくは濕氣なきこと能はす棺を造るに不便なりよりて時に臨みやむことを得さらんには厚さ一寸の板を用ふへし一寸板は所在に必すあるものなり杉檜松樟いつれの木にてもよく乾きたるを用ふへし古禮に拘り泥めるひとは薄きに過きて用ひかたしともおもふめれと今良法を得て松脂もて裹めはいにしへ用ひし厚材にまさること遠かるへし松脂もて棺をつゝむこと周秦の古書に見えされとも極めて良法なり稱用すへし墨子の書に堯舜禹の棺みな葛もてこれを緘せりといふこと見ゆこの言疑はしきに似たれとも禮經にも皮革もて棺を束ぬることを載せ又熬黍稷と魚脂とを棺旁に設けて蚍蜉を惑はしむると云ふことあり又劉熙の釋名にも棺束曰緘緘咸也古者棺不釘也と見ゆれは墨子の言

あなかち疑ふへからす古代智巧の足らさりし時にはかゝることもこそありつらめとおもはるゝなり葛もて緘し皮もて束ぬるいかに固くちからを用ひむもその合ひ目の臭氣を漏さゝるやうやはあるしかれはこそ蚍蜉を惑はすの設にも及ひつらめ臭氣の漏る程ならは水氣もまた入りつへし水氣入りなは木の厚きもなにかはせむ喪大記に君と大夫との棺を蓋ふに漆を用ふること見ゆれとこは唯その縫際を塗り塞くまてにて全棺を塗ることゝは見えす又漆も水土の氣に遇ふてはやかてその堅緻の性を失はさることを得すかゝれはたとひ六寸（喪大記）七寸（孟子）八寸（喪大記）の材を用ひて漆を施すとも久しからすして終に土質に化すへし今良材を得すして一寸の木を用ふるも松脂もて全棺に被らしむる時は牢固堅實にして臭氣を漏らすの患なく又水氣尸を侵すの恐れなし水氣たに滲透することなくは永く朽腐をまぬかるへしこれをかの厚材を用ふれとも尸臭の泄るゝをも防き得す埋葬の後水氣膚に親つきその棺材を幷せて速かに土化するにたくらへ見はいつれか贏いつれか贏智者を待すして辨へ得つへしさてその棺の造りやうは裏面に成るへき方のみ鉋を用ひその表面は鋸にて挽きし

ままなるへしかくするにふたつの子細あり一つは板をして薄からさらしめんかためなり一つは塗る所の松脂をしてよく板に粘綴して剔剝せさらしめむかゝなりその四隅底蓋ともありさしといふものにして更にしけく鐵釘を下して堅むへしその外面は松脂を煉りて周ねく塗るへきなり程子の棺を裹むに松脂もてするの說は誠によしたゝ雜書の松脂地に入ること千年茯苓となり萬年琥珀となるの言を引かれしはいと淺はかなり茯苓あに松脂の變する所にして琥珀豈茯苓の化する所ならむやかつ松脂一物のみにては裂やすく剝けやすしひとたひ裂剝することあれはいかにあつく施すも前功皆空し高閣その裂るを病て少しの蚌粉黃蠟清油を合せ煎し用ふへしと云ふと雖もその劑量を云はすこれもまたおろそかなりおのれ西洋書中に參考して一方を得たり棺を塗るに用ひてその妙いふへからす今しるして同道に貽るその方松脂土芥を雜へさるもの五分黃蠟二分猪脂半分おの〳〵細かに碎き或は切り片にしひとしく銅鐵鍋に入れ焰の揚らさる漫火に上せ（必すかくするは火の入るもんことを恐れ防ぐなり）棍もて手を停めす攪せよく溶和せしめて泡立ち沸あかるまてに至り背ある器に移し（俗に片口なと云ふもの）一人その器をとり棺面に傾るを兩人棺の左右に在りて幅廣き木篦もて大よそ厚さ一分はかりにむら〳〵なく塗りわたしさて上に白堊の粉を篩もてふるひかけ箒にて刷き去るへししかすれは物に粘するの患なし蓋を掩ひ釘を下したる後その合際には更に溫め能く熔して流し入るゝやうにはからふへし

後儒棺を合するに釘を用ふることを欲せすして鐵鏽板を壞り釘擊尸を震はしむるなといふものあれと燕尾錠筍はいつれも鐵釘の固きにしかすかつ釘を用ふるもその頭深く松脂の下に沈めて濕をひき鏽を生するの患なし尸を震はしむるの說に至ては尤も迂怪といふへしたとひ燕尾錠筍を用ひんも椎擊をはまぬかるへからす均しく椎擊なり何そ釘うつのみしからんもし椎を用ひすして合する程ならはその棺脆鬆にして解け易く久しきに耐へさるへし去れども强て震尸をはゝからは螺釘を用ふるにしくはあらし擇ふへし

後儒棺縫を塞くに銀硃漆の方を稱用すその說に云く硃性極めて濕氣を收む凡漆器を密室中に置くに雨日に遇へは必す潤を生すたゝ硃漆のみ獨り乾く故に此法を用ふへしと理に暗き論なり果して然らは硃漆はかきりて用ふへ

からすいかにとなれは雨日に外に潤を帶びぬるは濕氣を內に引かさるの驗なりその時にあたりて乾けるは濕氣を內に吸收せるしるしなり濕氣を吸收するはその質に氣眼ある故なり氣眼の內濕氣を含めはその質やかて軟化して遂に剝脫せさることを得すこれ理の明かなるものなり漢人多く窮理にうとくその言杜撰臆說多し擇はすはあるへからす

又蛀の棺木を壞るを恐るゝ說あり蛀はもと外氣の入るより生す今わか法もて棺に周すれは外氣入る所なくして蛀もまた生するによしなかるへし

かくその棺を制すれはその殯日を久うすといへとも臭をもらすの恐れあることなし孝子もし寸板の薄きを嫌はゝしつかにさらに椁を造らむも本より妨けす王制に六十歳制の制ありと雖もその椁は死後に至て造ることなり檀弓に旬而布材といへるその證なりたゝし棺木厚きに過きぬれは重くして擧けかたく壙中地を占むること廣くしてその木腐壞の後必す壙土陷落するの患あり故に木の厚きに過るは好むへきにあらす椁も聖人の制にしていにしへより用ふる所なれとも保藏永安を謀れは用ひさるにしかすと司馬溫公はいはれたり孔子の御子伯魚を葬り給ひしも棺ありて椁なしと云へりこは孔子の貧しかりし故と聞えたれと周代禮文の盛なりし時に聖人の家にてたに省き給ひし所なれは今の士大夫の家に在りては椁はなくてそ宜しかるへき

棺を動かすに便りせんとて底に太き鐵鐶を釘して索をつらぬくの說家禮に見ゆれと鐵は朽ちやすくかつ棺の弱みともなるへけれはしかせさるにしかす但肇牀を小方牀の如くに高さ七寸はかりに作りてその前後には二長杠をつらぬくへき孔を穿ち（出棺の時まては杠をは貫ぬかす）面には杠に跨りて大索を透すへき孔八つあるへし四方には大鐶二つ宛を施し麻の大索を貫ぬきさて棺をすゑ（棺を肇牀に居るには先つ下に紙二十枚はかりを周くしてその上に居ゆるなり）その索を取りて棺を動かすへし出棺の前に至りその索もて棺を肇牀に結ひ附け更に太き麻索を取り杠の下より牀面の孔へ引き出しそを互に取りちかへて固く結ひさらにもぢといふものを加へてその索を堅くすへし又塗りたる松脂を剝さゝらんためにはかねて方寸の角木の長さ棺と齊しきを取りその一隅を內へ角に刊り去り大やう剝刀の形のことく造りてその四隅々々に當てその上に索をかくへし棺衣は白布もて制すへしその品に應し

て帛を用ひむも本より不可なし

近ころ苟簡の俗に狥ひ瓦棺の說を唱へて水甕もて棺となすものあれとも快からさるわさにしてかつ送葬の道の程甚危し效ふへからす市中野外いつれの道を行かんも逸牛奔馬なきことを保つべからすもしこれありて舁夫に觸れんに地に墜さゝる事を得へからす瓦棺地に墜ちは必す碎くへし棺もし碎け散りなはいかんとやするかゝることおほかたはあるへきことにしもあらねと喪は大事なり萬に一つも悔ゆることのなからむやうに深く慮をめくらさすはあるへからす子思も凡附於身者必誠必信勿之有悔焉耳矣と云はれしにあらすや

誌石

誌石は後來發掘の患を防かむとてのはかりことなれはなくては叶ふへからす石の大小ははしめより定制なし大やう兩面平かにして大さ棺を掩ふ程なるを擇ふへし漢土にては石二枚を用ふることなれとも一枚にして事足りぬべしその書法異朝にては唐の代よりこなた大やう同しけれともこれを諸書に考ふるにそれより前は一やうとは見えす本朝にてもかくはあるへき近き頃に至りて其石の表に假名文字を取りまぜ此所某姓名の遺骸を藏むと誰人にも讀やすきやうにしたゝめ裏にその歷官生卒を眞文にてしるしその實を傳ふへしといふ說あり大かた世人の用ふる所なりされとおのれは尙その表の書法を改めたくおもふなり

宋書何承天傳に文帝開玄武湖遇大冢得一銅斗帝以問群臣承天曰此新葬時威斗三公亡皆賜之葬時三公居江左者惟甄郗此必郗墓也俄而冢內更得一石銘曰大司徒甄郗之墓と云ふこと見ゆこれ漢代誌石の書法なりされは今この法を取りて誌表は某姓名墓としるすへし文字も少く俗眼にも更に知れやすくしてよかるへしその裡面の眞文はあらむもなからむもおの〳〵の心にこそ任すへけれた年月はある方そまさるへき書法覺束なくは心得たる人に問ひはかるへし

沐浴

沐浴は古禮今俗みな爲す所なりと雖も人情に求めて甚快からすおほゆるなりいかにとなれは生時裸體もて人に見ゆることなし死して後人にゆかせて浴せ

しむるもし知ることあらむにあに快しとする所ならむや故におのれは荀子の言に從ふにしかすとおもふなりすなはちその書に不沐則濡櫛三律而止不浴則濡巾三式而止とあり律は髮を理むるなり式は拭と同し荀子は周代の儒にしてしかも禮を好めりしかしてその云ふ所かくの如し今これに從はむに誰かそを不可なりといはんされは今俗に任せて沐具浴具を備ふるとも必しも用ひす髮をは櫛を濡して三たひ理めてやみ面をも巾を濡して三たひぬくふて止むへしもし下體汙穢あらは拭ひ淨むへきこと言を待たす

襲斂入棺

襲は尸に禮服をきせ參らするをいふ異朝にては襲して後冒もておほふなり冒は上下二躰にしていつれも直囊の如し上を質といひ下を殺といふ殺は足を韜みて上行するものなり質は頭をつゝみて下行するものなり今これを略す斂は數々の衣裳もて包みまゐらするを云ふ古禮には斂にも小斂大斂の別あり小斂の衣は美なるもの中にあり大斂の衣は美なるもの外にありその儀節もとより亂るへからすしかるを溫公書儀文公家禮二書には兩斂を合せて小斂にあて斂

棺もて大斂にあつるに似たり二公あに古人大小斂の制を知らさらんやまさしく當時人に從ひ易からしめむとてかくその煩文を去り簡省の法をは定められしなるへし本朝殊に簡易を尙ふの俗なれは更に斟酌を加ふへきなり髮を律し面を式ふの後臥牀の旁にあたらしきたゝみを鋪きその上に褥をしき褥の上に衿をしく但し衿は角違ひなるへし衿の上に小袖二つを一つを顚倒して裾を深くかさねてその上に襲し參らすへき禮服をしきさて今まてふし給へる褥上に就て面を掩ひし服紗の上に兩角を合せて腦後にて結ひ褌を着け（毋ならは湯貝）下着をきせ襪をつけまゐらすへしさてしき設けたる禮服の上に遷し生時のことく着せ參らせ帶ひもは皆眞結にするなり

異朝本朝とも襲する時の衣を左衽すへしといふものありこれ士喪禮乃襲三稱の鄭註に凡衣死者左衽不紐といへるに誤り據れるにてゆゝしきひかことなり抑左衽は夷狄の俗なり孝子は死につかへまつること生につかへまつるか如しといへりさるを親のうせ給ひていまたその日をも竟へすして忽ち夷狄の俗とし衽を左にしまゐらせむことこれをしもしのふへくはいつれをか

しのふへからさらむはたしてしかあらんには死者にして知ることあらはよく愧憾することあらさらめや聖人終を愼みたまふの禮にかゝるまさなきことあるへくもあらすおもふに鄭氏の士喪禮註に云々するものは蓋し喪大記の文によりて誤れるなり喪大記には大斂小斂祭服不倒皆左衽結絞不紐と見えたり鄭註に反生道也とありこれまさしく小斂大斂の禮にして襲禮をいへるにはあらすしかるを鄭康成の大儒にしていかにしてか誤りけん小大の斂法ははしめにもいひしか如くたゝちに尸に衣するにはあらす襲の後冒もて韜みし上をさらに衣裳もて或はたゝしく或は倒にしてつゝみしたゝむるなりそをも生時ならましかは右を先にし左を後にしすへての帶をも屈紐して解き易くせましを死者には復解くへきのことわりなしとて衽を左にしつゝ生時衽を右にするは解く時に便りするなり帶も眞むすひにするなりはしめ襲するをりには衣帶をも常の如くにして小大斂に至りてかく生時とうらうへなるおきてを用ふることとこれなん禮は變するを貴むのいはれなるへき

さて起したて半坐の形にし腰刀を膝の上におき小袖一つを取りてたゝみて上

よりうちかけ顚倒してしきたる衣もて下より上に掩ひ袖もて胸前を左右と掩ひさかさまにせさる衣をうち返して袖もて背後を右左とおほひさて衿の四角を左を先に右を次に前をまた次に後を終りに打返し白布六尺一幅を二つに裂きたるもて横にふたところ結ふへし棺にははしめ木灰を篩ひ紙袋にもり袋のまゝ底に鋪くこと三寸その上に小褥を加へさてかさねたゝみのかたはらに席しきて棺はその上にあるへし尸を斂め參らするにはまつ綿入りたる衾を棺中に置きその四裔を棺外に垂れ子孫婦女侍者ともに手を盥ひ共々尸を擧て棺中に納れ參らせ衾裔の前を先に後を次に左をまた次に右をのちに掩ひ存生の間の髮爪落齒なとは棺の角々に納めすきますきまは弊衣のよく洗ひ淨めてよく乾かしたるにて動搖せさらん程に務めて充實ならしめて後蓋を加へ釘を下し松脂を煖めてその合際を心して塗り塞くへしその後上座に居ゑまゐらせ前に靈座を設くへし異朝の禮は靈座を柩側に設くることなりこはいにしへ柩を拜するの禮なきか故なり今の人情柩を拜せさること能はされは前に設くるをよしとす禮座は中央に高き卓を設け側に太刀又は衣架に禮衣をかけ置くなり前

には少し低き卓を安んし又その前に香案を設く禮座すてに定まる時手を盥ひ饌を低卓上に供へ香を焚き盞に酒くみて奠すへし神主成りなは高き卓に置き奉るへし

禮記問喪に三日而後斂者以俟其生也三日而不生亦不生矣孝子之心亦益衰矣家室之計衣服之具亦可以成矣親戚之遠者亦可以至矣是故聖人爲之斷決以三日爲之禮制也と見ゆれとこはそのむかし人身の窮理に至らす醫術もいまた明かならす假死を認めて眞死とせるものありしによりて聖人のかゝる制をしも立て給ひしなるへし今の世にありては醫のわさもすてに精しく人身の窮理もゆきとゝきて死して再ひ生くへからさることは始めて死する時既にあきらけくまた生なん望は露かくへくもあらすしかるをこの制に拘はりて暑月なと三日待なんとするあひだにその尸腐敗して臭氣座に滿ち人をして厭惡せしむるに至らんにはその親を恥かしむるの罪のかれかたし異朝の禮士大夫ともに三日にして殯するとはいへとも本より深くその臭氣の泄りて人の惡まむことを恐る故に死するの日に必す襲して冒を加へその第二日黎

明小斂するに必す十九稱の衣をもてしその第三日黎明大斂するに必す三十稱の衣を備ふ稱は今一かさねといはんかことしこれ聖人の深意なりいま悉くこの禮を備へむには異朝の禮によらむもしかるへけれと今こなたの士大夫財に乏しきかおほかれはいかてかこの數十稱の衣裳を製してその禮を行ふことを得んされは眞死と知りなはその哀痛を忍ひてとく造棺を命しその尸の臭を起さゝらんさきに棺斂せまほしきなり家のはかりこと成らすとも衣服の具備はらすとも親戚の遠きもの至らすともさてありなむ父母の尸に恥見せ參らするに比すれはものゝ數にあらす今しはし留めまゐらせてむとおもはゝ送葬の日を寛くしてそのこゝろを致すへし

春秋左氏傳僖公三十二年冬文公卒庚辰將殯于曲沃出絳柩有聲といふこと見ゆ經文を案するに晉公重耳のうせられたるは十二月己卯なりされは庚辰はその翌日なり禮に牀に在るを尸といひ棺に在るを柩と云ふ今柩と稱すれはその棺に斂まりしこと明かなり小斂大斂斂棺ともに皆一日の内に行はれし事なるへし諸侯の喪禮は五日にして殯すること常なるにかく速かなりしは

甚しき變禮と云ふへしされと今この方の士大夫に於ては却て還葬の一例ともすへきか

成服

異朝の禮に成服といへるはさきにすてに經帶しぬるを今また冠衰のたくひもて足し成すゆゑにこれを成服といふなり本朝に經帶の制なしと雖も初終の時常服を易へ今また眞の喪服に改むれは同しく成服と云ふへしいまこなたの士大夫常に冠を冠することなけれは唯衣服のみを改むるなり士大夫は上下醫師茶道のたくひは十德その以下は羽織袴その喪の重き輕きに從ひあらき細き白麻布もて縫ひつゝりて着るへしその說下につまひらかなり

古禮三日にして服をなすとはいへと生には來日をかそふるの制なれはその實は死日の第四日にして殯日のあくる日なりされは今も服を改むるは斂棺の後なるへし前日棺に斂めてそのあくる日葬を送らむとならはその葬りの日の黎明に服を成して可なり

喪服は禮經に所以飾衰と見え本朝にても服とし云へは喪のことゝ聞ゆ凡そ喪

あるもの常に別なる服をきること彼我に通ひし習ひなりしかるにいつの頃よりかくなりくたりしやさたかならねと父母の喪にさへその服を着すそをあやしみ咎むる人たにたえてなき世となりぬるこそうたてけれ今の世の人多くは忌てふことを喪と心得て忌あけぬれは喪を終へしことゝして常に復ることあさましなと云んもおろかなりいまの忌てふことは令には假としるされたり官に仕ふるもの喪ある時はその喪の輕重について暇を給はり憂にこもり居ることをいふなりしかるを神道家の神祇服忌令といふものに假の字をあらいみと訓あり元祿の令にはそを據として忌の字を用ひられしことゝ見ゆ忌の字よりして貴人の前に穢れを忌むなとの說は出て來しものなり假は勤仕のものに給ふ所なれはその日數終へぬれは出ておの〳〵その事に從ふこともとより論なし唯父母の喪のみは職事の官其官を解くこと令にある所の法なり人に孝道を訓へ風俗を敦うするの良制といふへし但し大朝の制父母の喪といへとも其官を解くことなく五十日の暇を給りてその日數の後任に從はしめらるゝはまた據る所ありてやむことを得さるところなり禮記曾子問に曰く子夏問曰三年之

喪卒哭金革之事無避也者非歟孔子曰吾聞諸老聃曰昔者魯公伯禽有爲爲之也と註に據れは當時魯國に徐戎の亂ありし故に魯公喪にありなから卒哭にしてこれを征せられきこれ王事を急にせらるゝなりといへり大朝發亂の後武をもて治を爲し給へれはこの制を設けて武臣を馭したまへることあたる所あるなり但親喪はみつから盡す所也親に後れて喪を終ふるは人の子たるものゝ常の道なり太平無事の時金革危急のことあるにあらす然るを祿位を貪り榮進を冀ふの心より喪にあるの憂を忘れ宴にあつかり皷笛をきくこと平時に異ならす遂に相習ひ風を成し賢者といへとも靡然としてこれに從ひ愧となさゝるに至るいと〳〵歎かはしこの本を原ぬれは喪に服なき故なり志あらんものは古に復りて喪には必す喪服を着てその哀意を表すへきものそ

古禮に受服てふことあり三月過て卒哭の祭を爲す時に至り初喪より服せし服に受けて別服を服することなりたとへは服三升のものは受るに六升をもてし四升のものは受るに七升をもてするたくひ是なり斬衰齊衰はその制殊に麁惡にして日を經るまゝに壞れ易し故にこの制あるなりしかはいへと唯三年の喪にのみ受服あるにあらす期の喪九月の喪また皆これありしかるに唐の開元禮明の集禮會典に至るまて練服禫服の制は見ゆれと受服の制遂に見えすこは古禮壞れしより道釋の七々百日の期を用ひ衰麻を釋き去りて平常の素服に換へ受服を制するもの絶てなきものからもろ〳〵禮を議するの家もまたその時俗に因て受服の說に及はさりしなるへし本朝服制殊に詳かならすたゞ令に天皇本服二等以上の親の喪の爲に錫紵を服し給ひ（義解に錫紵は細布即ち淺葱を用ひ染むるものと見ゆ）三等以下及ひ諸臣の喪の爲には帛衣を除き雜色を通用し給ふとのみ見ゆ

天皇の至尊をもて諸臣の喪まてに御服を改めさせ給ふことといともかしこき御事ならすやさらは公卿以下もその五等の親に於ておの〳〵その服のありしことおもひやるへししかはあれといかなる服を用ひられしと云ふことは知るへからすまして受服練禫の制に於てをやたゝ諸書に凡そ喪に遭ひぬるもの貴賤となく藤衣をきしことをのすその染料は委しくはものに見えねと令義解に錫紵は淺墨もて染むといへれはなへての藤衣も異なる染方にはあらさるへし今の薄墨色は五倍子に綠礬を加へてそむる也しかするも苦しからし藤ころもは

異朝にて墨衰といふもの也墨衰は晉の襄公か凶服もて戎に從はれし時に始まり後世喪に居て出入事を治むるもの權に從て服する所なり今これを用ひ假滿の受服となすへし

今大やう喪服の制を定めんに形は皆禮服の姿なるへし（上下十德の類）その粗細生熟の序は一等の親には極めて麁なる生麻布二等の親には次等の粗布三等の親にはあらき熟布四等の親には稍細やかなる熟布五等の親には細やかなる熟布を用ふへし受服（墨衰）には一等の親にあらき熟布二等三等の親にやゝ細やかなる熟布四等五等の親に細やかなる熟布なるへし

人倫の道は德をもて本とし德は孝をもて先とす上古は親喪の期に定まれる數はなかりしかと孝子仁人は悲痛思慕のせちなるより遂に身をはたし性を滅すものありけるとそ凡そ天地の間に生れて血氣を含める類ひに知覺の性あらさるはなく知覺ある類ひにその同類をいつくしむことをしらさるはなし見すやかの鳥けたものすらその群匹を失ふことあれは月日を越ゆれとも必すその故郷を過きて或は飛鳴し或は立ちめくり躊躇踟躕して漸くにして去りぬることを燕雀のさゝやかなるものと雖も猶しはらくは啁噍として啼き悲しむさまありけに人として親を喪へるこゝろの哀みいのちしぬるに至るまて窮りやむことなきはことはりならすやしかるに衆庶のおろかなるあしたにその親を喪ひ暮にそのかなしみを忘るゝものありかくては鳥けたものにたもしかすと云ふへしかゝる輩をして禮法の教なくて群居せしめんには必す暴亂に及ひつへし故に中古の聖人中人の情に縁りて喪制をさため過きなんとするものには俯してこれに就き及はさらむとするものには跂てゝこれに及ひ天下の人に賢不肖となくおの〳〵その恩親を盡し孝道を彰はしてその德を厚うし群居して和一順睦ならしめむとて至親の喪を期もて斷しめ給へり期は一年をいふ即ち十三月なり其期をもて斷しめ給へりし源をたつぬるに天地すてに易り四時すてに徧ねく凡そ天地のあひたに在るもの更始せさることなけれは哀戚の心に感しぬるものも少しく衰ふることなきこと能はさるの故とそ聞えししかるに後世聖人君子の喪に籠りて一期を過すこと駟馬の隙間を過るか如しとてさらに加隆して再期の制を定め天下の通喪として上一人より下庶民に至るまて違ふこ

となからしめ給ひきこれを三年の喪といふ禮記三年問に三年之喪二十五月而畢といひ喪服小記に再期之喪三年也といへるこれなり以上禮記荀子通典等の意を取てしるす所なり三年の喪を至重として期の喪これに次き九月五月三月の喪またこれに次く恩あり理あり節あり權あり具さに禮經に載せて學士大夫世々これを守る重といふへししかりといへとも周の代夷厲の時にあたりて時人すてに三年の喪を行ふこと能はす毛詩の檜風素冠の詩を讀て知るへしその他春秋傳及ひ孟子の書に於て當時服制の定めなきを見る漢の世に至ても文帝短喪の詔ありしよりその代を終るまて四百年の間よく三年の服を全うせしは三四人に過きす唐代に及ひては遂に日をもて再期の月に易へ二十七日にして至重の喪を除くに至れりあさましきことならすやわか皇國にもいにしへは三年の喪行はれしとか孔子のよく喪に居れりしと稱し給へりし大連小連もわか御國の人とそいふなる文武天皇の大寶中に律令を定めさせ給ひし時至重の喪を期に斷しめ次は五月次は三月次は一月次は七日これをもて衰齊大小功緦麻の制に準へ給假の日數をも定め給ひき君父の至尊をも期の喪と定め給ひしこと三年の喪あるに比すれは薄しとも申すへけれとこは中古聖人の中人の情にもとつきあめつちの變に象とり四時の化に法とりて定め給ひし制なれはもとよりいろひたてまつるへきにあらすかつ再期の制を存して守るものなからむよりはむしろ一期の制を定めて天下億兆の民をして悉くこれによらしむるにしかし慎てこの制を行はんには固より民德をして厚からしむるに足りぬへしそも〳〵孝子哀慕のこゝろ窮まりやむ時あらさるへけれはたとひ再期の喪をもて限りたれはとてこゝに至て猝にその情を忘るへきにあらすたゝそのかためにの制あるかたに俯してこれに就のみなりはしめより三年の喪をもてその親に報ひ奉るに足れりとするにはあらすかゝれは期もてこれを斷たんも遂に同しこゝろにこそあるへけれ

喪服小記に親親以三爲五以五爲九上殺下殺旁殺而親畢矣といへりおのれの身上は父を親しみ下は子を親しむ父と子とおのれとを并せてその數三なり父を親しむより祖を親しみ子を親しむより孫を親しむこれ三をもて五と爲る也祖を親しむより高祖をしたしみ孫をしたしむより玄孫を親しむこれ五をもて九と爲る也殺はそくと訓むおのれより上高祖に至るまて五世おのれより下玄孫

に至るまて五世旁ら三從兄弟に至るも又五世なりその恩厚きものはその服重く其親しみ淺きものは漸くにして輕くその六世に至るものは親屬竭きて服なしこれを上殺下殺旁殺して親畢るとは云ふなりさてその服てふものは親族の親しきと疎きとを序てゝ人倫を明かにし仁義の道を隆くする所のもの也その義理甚深し故に大傳に服術といへり術は道術經術學術の術に同しいにしへ服制をもて一術とせしこと見るへし異朝代々の大儒に喪服もて家に名ありしもの少なからす漢の夏侯勝かよく喪服を說ける蕭望之か勝に就て禮服を問ひたる宋の元嘉の末雷次宗か太子諸王のために喪服を講せる齊の何修之か國子助教たる時諸王の爲に喪服を說けるたくひその證となすへし冠婚祭會諸吉例の如きはその制定まりて變するものなし獨り喪服に至てはその變するものあけて數ふへからすやゝもすれはその旨を失ひ易しされは異父昆弟の服をもて子游は大功なりといひ子夏は齊衰なりといへるたくひ又孔子のうせ給ひし時門人その服する所に疑ひ又子思のその子に出母の服を服することを聽されさりしを門人の不審せしか如きこれ皆資質聰敏の人にして仰いて周典を讀み俯して聖賢につかへ飫くまて誨訓をうけ歲月を累ねしも喪事に遭ふに逮へは猶尙かくの如し喪禮の明め難くして惑ひ易く詳に議定せすはあるへからさるとこゝに於て亦見るへし本朝大寶に定められし令喪服給假の文甚た略して備はらす當代元錄に頒れし所も多くは大寶令に依準せられしとは見ゆれとこれを禮經に考ふるにその義理を盡さゝるものすくなからすこれ當時その事を議し申せし儒臣のその學ふ所おろそかなりしか致す所哀むへきのみ新井筑州か折たく柴の記に載せられし大喪の議その一證なり同書に文昭廟御治世のはしめに倭漢古今の喪服の制を問はせ給ひ筑州の書にしるし圖に作りてたてまつられしこと見えたり此事によりて考ふれは當時すてに元祿の令に安んしさせ給ひ難きふしあるによりて訂正せさせ給はん御旨のありしとこそおほゆれかゝりしかとも遂にその事に及はれすして今日に至りぬることといと惜むへきこと也唐堯の萬邦を協和し給ひて黎民あゝ變りこれ雍くに至りしもその本は九族を親しみ給ひしに始まり周公の刑措くの治を開きたまひしも喪服の制を定めて親々の道を厚くし給ひしに由る所なり今治道を隆くし薄俗を敎うせんとには

服制を訂正し天下の人をして親々の道を知らしむるにしくはなし今頒行の令本宗五等の親に於てその服なきものすでに半に昆弟の子從父昆弟姉妹及ひ衆孫の服七日に過きさるたくひこれを人心に求むるに極めて安からす夫れ人情の變窮りなし禮はその變するものに適くを宜とすいま世の人情日に薄きに趨く薄きを救ふの道厚きをもてするにしくはなしされは人心の安からさる所は天理のある所に求め聖人の經に折衷して更定あらまほしきものなり

聖人喪服の制或は引てこれを近うし或は推してこれを遠うし上は高祖に遡り下は玄孫に至り旁三從兄弟に及て親を親しむの道畢るその親を親しむの中に尊を尊ひ長を長とし男女別あるの教をこめたり人道の大なるものなりさて父母の喪は譬へはその本根にしてその餘は譬へは枝葉なりしかはあれと枝葉凋零しぬれは本根つひに危きをまぬかるゝこと能はす故に父母の喪には祭らす人を弔はす人に贈りものせすといへとも親戚の喪としいへは必すその服を服して（その服とはその輕者の服なり）往きこれを助くることといにしへの禮なり今本宗五等の親その服なきもの半に及ひその服あるへきもの亦つひにこれか爲に服せすかくては枝葉すでに槁れて本根の存せるものもまたいくはくなしおのれ竊に深くこれを憂へ服紀令の增訂を乞はんとする志ありかつて大寶の令を準とし異朝よゝの制に考へ義類を推窮して圖ひとひらを作る（圖下に見ゆ）しかれとも敢てみつから是とするにあらすたゝ禮を議し給へらむ君子の詳考して採擇し給はんことを冀ふのみ

いにしへ聖王の禮を制し給へるは大防を立て大分を明かにしうたかはしきをことはり微かなるを顯はにし給はむとなりかるかゆゑに喪服の制たゝ親を親しむの恩あるのみならす貴を貴ふの道あり父を嚴にするの訓あり統を尊ふの則あり出るを降すの義あり一に從ふの制あり別を示すの教あり貴を貴ふの道とは天子と諸侯とは旁期を絕ち大夫は降すこれなり父を嚴にするの訓とは父の後たるもの出母のために服なく庶子父の後となれはその母の爲に緦するこれ也出るを降すの義とは姑姉妹女子子々の人に適くものに大功するこれなり一に從ふの制とは婦人の貳斬せさるこれなり別を示すの教とは嫂叔の服なきこれなりしかるに今の令本宗五服の親その服なきもの半なれは親を親しむの恩

に於てすでに盡さゝる所あり諸侯の旁期を絶ち給ふと大夫の降服あるとを聞かされは貴を貴ふの道に於て遺すところあり父の後たるもの出母のためにも同しく服あり庶子父の後たりと雖もその母のために降さす父の後たらさるの庶子嫡母の爲に一月小功に準すを服し凡その子繼母の爲に一月を服するは父を嚴にするの訓に於て缺くことあるに似たり父その長子の爲に兄弟姉妹と同しく大功に準して三月を服するは甚た輕くして統を尊ふの制に於て憾むる所あり姑姉妹女子々の人に適くものその室にあるとその服同しこれ出るを降すの義なくわれに受けて厚くするものあるを知らさるなり女子人に適くと雖もその本宗の親を降さゝれは一に從ふの制闕けて尊を貳するに嫌はしその本親の服あるへきものすでに服なけれは嫂叔の服なきも別を示すの敎を表するに足らすこれ等みなおのれか服紀令の增訂を乞まくねかふ所のものなり

喪に忌てふことのあるいにしへのふみに見えす今その日數をあてゝ考れは令文の假の字にしてそをあらいみと訓めりしより轉して忌の字と成しこと前にしるすか如しされは忌はもと仕に從ふものにおほやけより給ふ所のいとまなりおほやけの御身つからとり給ふへきものにあらす然るにおほやけにも御いみてふことのおはしましてやかて御忌とけさせらるゝといふことのあるはいかなる御事とも辨へられす御喪服のあらむあひたは何事も吉に從はせられかたき御ことなるをや

擬請訂正服制圖

一年以十三月爲限不計閏月給假五十日惟夫三十日

君 天子諸侯卿大夫有地者皆曰君

父

母

嫡母 妾生子稱父之正妻　舊服一月今進在此

繼母 父之繼室　舊服一月今進在此

夫

本主 其文學家令等不在此限

嫡孫承祖者爲祖 爲曾祖高祖承重服亦同

爲人後者爲所後父母

凡男爲人後者爲本生親屬服期皆減半雖其父母無不然服七月假三十日其本生親屬爲之服亦如之

五月以下並皆計日給假三十日

祖父

祖母

養父

養母

夫之父母舊服三月今進在此

嫡子舊服三月今進在此

出妻之子爲母舊服一年今降在此出妻之子爲母期則爲外祖父母無服出妻之子爲父後者爲出母無服

妾爲女君補

三月給假二十日

曾祖父

曾祖母

外祖父

伯叔母補

同居異父兄弟姊妹

從父兄弟姊妹舊服七日今進在此

養子

衆孫稱衆孫者不論男女　舊服七日今進在此

兄弟之子舊服七日今進在此

母之兄弟姊妹即舅姨

庶婦補

夫之祖父母

嫡孫婦補

七日給假三日

族曾祖父補

族祖父 補
從祖父 補
從祖姑 出嫁無服 補
族父 補
族姑 出嫁無服 補
從祖昆弟 補
從祖姊妹 出嫁無服 補
族昆弟 補
族姊妹 出嫁無服 補
從祖昆弟之子 補
從父昆弟之子 補
從父昆弟之孫 補
兄弟之孫 補
兄弟之曾孫 補

曾孫
玄孫
外孫
不同居異父兄弟姊妹 補
姑之子
姊妹之子
舅之子
姨之子
從祖々母 補
庶母 謂父有子妾 補
從父昆弟之妻
昆弟子婦 補
孫婦 補
夫之曾祖父母 補

外祖母
伯叔父
姑
妻
兄弟姊妹
繼父同居者 不同居者無服 舊服一月今進在此
夫之養父母
衆子 稱衆子者不論男女 舊服一月今進在此
嫡孫 舊服一月今進在此
嫡婦 補
庶子爲父後者爲其母 舊服一年今降在此

凡姑姊妹女子々出嫁者爲其本宗之親服期皆減半雖父母無不然 服七月假三十日

其本宗之親爲之服亦如之其七日者則四日假二日其在室或嫁反或雖適人而無主者並與男子同

一月 給假十日

高祖父
高祖母
從祖祖父 補
從祖祖姑 補
夫之諸祖父 補
夫之諸祖姑 出嫁無服 補
夫之伯叔父母 補
夫之姊妹 補
娣姒婦 兄弟之妻相名 補
夫之兄弟之子 補
夫之兄弟之子婦 補
妻之父母 補
壻 補

古禮年十九至十六爲長殤十五至十二爲中殤十一至八歲爲下殤長殤中殤降正服一等下殤降長殤中殤一等今長中下三殤並降正服一等其服七日者則降服四日給假二日即三日至未滿七歲者爲無服之殤其已冠已笄則服之如成人

凡無服之殤本服五月給假五日三月服三日一月服二日七日服一日若不帶官人遭此喪者准假日數心喪居憂但文云無服故不可著服然既曰心喪則宜不飲酒不食肉不作樂也

本朝喪制簡質未備近世儒學寖振鮮言禮者聖人所重率不措意愼終之典莫能擧行民德之不歸於厚亦有以焉如其喪服既多不相爲之族給假又有未浹洽之恩若曰姑奉時制而不敢擬議固無可道然其有考諸經傳而不當求諸人心而未安者則亦當錄其所見以俟制作之君子恐亦未爲過也遂作此圖平大星識

成服の日にはその服あるものおの〳〵その服を服するに論なし服なきものも皆素服すること禮也されは今素服するまてに至らすとも必す華盛の服を去りて哀戚の容あるやうにこゝろすへきなり

朝夕奠

服を成して後靈座に朝夕奠を設くへし朝奠は日出る時夕奠は日に逮ふとて日入るまてにし平日朝晡の食の如くにして加ふるに酒羹茶菓をもてすへしこれより前始死奠あり小斂の奠あり大斂の奠ありそのほか食を薦め參らせしも哀み勝て文すること能はすその時限必しも定まらさりしなり成服の後始て日の出入もて定時とす故にこれを朝夕奠といふなり文公家禮には朝夕奠の外に別に上食の節あり重複なるに似たり必しも從はす朔望にはおのれ〳〵の分に隨ひその饌を厚うすへしあらたに熟するものめつらかなるものに遇ふ必すそを薦むへき也凡そ饋奠を奉つる時はその供物を靈座の卓上に置てさて香を焚き拜して心の內に饗け給へと念して身をおこしもとの座に復るなり卑幼もその折〻に靈座の前に出てぬかつくへし夕奠至らむとする時朝奠を下け朝奠至らむとする時夕奠を下くるなりいつれも罩子あるへし罩子は竹片をためてうすものを張りしもの也

弔奠賻

喪を弔ふもの皆素服すること古禮なり今の世にてもその心をくみて必す華やかなる服を退けて哀戚の容に叶ふへし奠には香茶菓燭の類を用ふるよろし賻は貨財もて喪者を助くるを云ふ親交の厚薄に從ひその賻も厚薄あるへし飲食を贈るもまた賻のたくひなり

治葬　穿壙

檀弓に既殯旬而布材とあり布材とは椁材を日に乾かして葬の用意する也こは三月にして葬る禮なれはなり今報く葬るの習はしなれは治棺につゝいて壙を穿たしむへし葬地はいかにも幽僻にして長く城郭とも道路とも溝池ともならさらむ所をかねて擇み置くへし今佛寺の境内に葬ることなへての習ひなれとも城市につゝきたる寺地は多くは泉源淺く且狹隘にしてのち〳〵發掘の恐れなきにあらす孝子のその親に厚からんことを求めんには別に葬地を置くにしかすその寺院山林によりてかつ墓地も廣からはその先塋に葬らむこともとより論なし

葬は藏なり深く藏むるを安しとす壙の深さは大抵一丈餘にして泉に及はさるへし廣さは僅に棺を容るゝはかりに穿つ最もよろし文公家禮治葬の條に灰隔を作り明器を造ることあり必しも從はす又朱子に棺の四圍上下炭屑もて實すること七八寸なれは濕氣を避け水患をまぬかれ又樹根を截り入らさらしむるの說あり甚たうけ難しいかにとなれは炭はよく濕氣を引くもの也貯へ置きたる炭を火に投するに必す湯氣あるにて知るへし既によく濕氣を引くいかてか水患をまぬかるゝことを得む又まゝ炭塊にしのふ草なとを種るものありそを見るにその根炭の裂けめに入りてよく蘖茂すかゝれは樹根を截て入らさらしむる全くその理なししかあれは炭屑も用ひすして可なりたゝ炭は土氣にも水氣にも長く變せさるものなれは後年もし發掘に遇ん時に或は人に心せしむるの便りともなりなんとて下棺の後に炭屑一二石を下しさて土を掩ふは猶やむにまさりぬへし

作　主

古禮にては初終の時に重を作りて神を寄せ虞祭するに及て桑木もて主を作る

これを虞主といふしかる後重を取り去り練祭するに至て又栗木もて主を作り虞主に易ふこれを練主と云ふ宋儒に至り魂帛祠版をもて重と虞主とに換へ小祥に至て更め栗主を作る皆煩はしきに似たり故に今此の時に於て不易の主を作る簡省に從ふなりいにしへより主を作るに栗材を用ふるはその質の堅きかためなりはしめより別に意義あるにあらずもし栗材なくは何木にても堅實ならむを用ひてよし木主尺寸の大小禮經に明文なき故に古今さま〳〵の說あり獨り伊川程子の式その義精しとて文公家禮もその制度を用ひ有明一代遵用して違ふことなかりきされとつら〳〵これを思へは律度量衡は時王の制をこそ用ふへけれさるを周人にあらすして周尺を用ふる義にかなへりといふへからすよりて今諸家の說を通し考ふるに何休か公羊傳の註に主狀正方穿中央達四方天子長尺二寸諸侯長一尺と見え漢書禮儀志木主尺二寸と見え通典に晉武帝大康中制大廟神主尺一寸と見え又通典に大唐之制長尺二寸趺方一尺厚三寸と見ゆれは天子の神主長尺二寸なること明らけし但江都集禮晉安昌公荀氏祠制神板皆正長一尺二寸博四寸五分厚五分と載す神板すなはち廟の主にして天子の神主と同長なるは僭越と云ふへし楊士勛か穀梁傳の疏に廙信か衞次仲の言を引きたるに云く宗廟主皆用栗右主八寸左主八寸（毛奇齡云一作左主七寸誤なり）廣厚三寸右主謂父也左主謂母也とこの說何休かいふ所の諸侯長一尺に殺くこと二寸なれは恐らくは大夫の制なるへし今荀氏の神板長一尺二寸博四寸五分と比例するにその長八寸廣厚三寸と云へる適合して奇零なしこれ必す受る所あるなるへしよりて更に通典唐制の趺方一尺厚三寸を比例して方六寸六分七釐厚二寸を得これをもて士大夫神主の定式となす杜撰にして考據なきものに優りぬへし神氣の憑る所必しも穿孔の有無に係るへからされは孔竅は穿たすして可なり此時主を作ると雖も桑主不文といへば文字を題せす儒葬ゆりたるものゝ外は假りに寺僧よりしるし贈れる追號の片紙を貼し靈座に安し置くへし

神主を題するは七々の前日なるへし題しやうは前面に先祖考姓名府君神主先考姓名府君神主先妣某氏孺人神主先妣某氏孺人神主と書し後面に諱氏生卒釋號をしるし旁面孝孫某奉祀孝子某奉祀としるすへし

神主の函を宝といふ祏ともかくなり說文に藏主之器とあるこれなり匱といひ

櫝といふ稱もあれとこは龜筮金玉なとを藏むる器に呼ふ稱なれは襲に近し宝
といふにしかす宝の制開元禮に見ゆるところ簡にして盡せり今その制を用ふ
その制底は主趺と同し大さにして下より上ること二三分その下は蓋の大さと
同し蓋は上より下りて底の外面と接合するなり

遷柩　朝祖

葬りの前に及ひ奠を設る時御柩を遷し奉るへしと告けさて廣間の上くらに新
しき席をしきまつ木主を捧けて家廟に至り主を前に設けたる卓上に置き暇乞
の心ありて夫より廣間に詣り柩を新席の上に遷し靈座をその前に設け主を卓
上に安んし奠をたてまつるへしこれを祖奠といふはなむけの心也遣奠をも兼
ることなれは分に隨ひその饌を厚くすへし異朝の古禮にては祖奠も遣奠も柩
の堂を降りし後に庭上にてすること也本朝この禮なけれは此の時の奠を祖奠
として可なり

載柩　發引

大轝を廣間へ納れさて香を焚き柩前に拜して御柩を轝に就け葬りに從ひたて
まつると告けて役者をして柩を遷し轝に載せしめ太き麻索もて治棺の條を照
して牢く結ひつけ棺衣を掩ひ死者と喪主の分に隨ひ供立を庭上に揃へ置き然
る後本主の函をさゝけ出てつゝいて棺を舁き出すへし喪主は引つゝき徒歩に
て從ひ喪主の母妻よりはしめて女はうは品に隨ひ乘もの又は徒歩にてそのあ
とに從ひ親族は又その跡他人は又そのあとよりゆくへし
出棺の時刻は埋葬の夜に及はぬ程をはかりて定むへし夜に入りてはよろづの
事苟且になりて然るへからすかつ虞祭をなすに便りあしゝ
葬には必す雨具を用意して持すへし
晝の出葬にも地摺高張の提灯を供立に入るゝこと世の習はしなり死事は幽陰
の義といへるこゝろなるへし俗にしたかふも可也たとひ俗に從はさるも提灯
の用意は必すかくへからす雨具を備ふると同しこゝろなり

及墓

今世の習はし必す柩を佛寺に舁き入れ寺僧の誦念ありてさて墓所に至るなり
まつ墓所に轝臺を設け柩をかきすゑ傍に靈座を設け神主の函を卓上に置き奠

をそなへ前に席をしき喪主以下みな出て禮拜すへし

この儀墓地狹くして爲し難くは寺院内にて爲すへし

下棺

まつ杠の下よりかけたる索を解き去り杠を拔き（もし杠拔くへからすは鋸もて伐り去るへし）解きたる索を畢牀の四隅なる鐶につらぬきその索を執り徐に柩を下すへし棺を下すには役者の手落せす力を用ひて傾墜の過ちなく動搖の害なきやうに喪主をはしめこゝに臨むもの心をつくへし棺壙底に至る時索を抽き去り炭屑を柩の四旁及ひ上に實しさて土もて掩ひ漸くにこれを築き地面より二三尺の所に至り誌石を下し文字の表を仰かせ平瓦もて掩ひまた土を實し堅くこれを築て墳を成さしむへし異朝にては葬於北方北首三代之達禮也と云ふことあれともこなたの墓地にてはなへてはこの禮に從ひ難し展拜するものゝ方に面の向かふやうに柩を下すへし

反哭

喪主以下神主の函をさゝけて家に歸り廣間の靈座に（執事のもの取つくろひ置くへし）すゑまゐらせその前に拜して哀を盡すへし檀弓に反哭之哀也反而亾焉失之矣於是爲甚と見ゆ異朝にてはこの時弔を受るの禮あり誠にことはりなりその身喪に遇ひぬるものおのつからそのことわりを知るへし問喪の入門而弗見也上堂又弗見也入室又弗見也亡矣喪矣不可復見已矣心悵焉愴焉惚焉慊焉心絶志悲而已矣の言人情を盡すと云ふへし

虞祭

虞は安と訓むなり親の骨肉土に歸して魂氣はゆかさる所なし孝子そを安んしまらせんとてしは〳〵祭りて誠を致す也故に虞祭といふ初虞は葬より反りてすなはち祭るへし葬の日日中に祭るをよしとすれとも墓所遠くは晩くとも苦しからすたゝこの日を出す祭るへき也もしその墓さらに遠く經宿ならては家に歸りかたき程ならは初虞はその宿らむ所にて行ふへし柩すてに壙に入るを見は執事者まつ歸りて虞祭の用意をなすへしその備ふへき品々

盥手の具　たらひ　水瓶　手巾架　手ぬくひ

饌の具　足うちの折敷　小角　大小のかはらけ　箸　箸臺（耳かはらけ）　高つき（菓子）

酒の具　瓶子（を盛るへきもの）　同しく口　同臺（折敷）　三くみかはらけ　同臺（折敷）　したみ

茶の具　磁鑑　茶碗　同臺（折敷足なし）

當用の人　祭に臨み主人の手をたすくるものふたりはかりあるへしいつれもみな謹厚なる生れの人を擇ひて用ふへしもしさる人なくはたゝ夫婦して祭りみたりにたすけをもとむへからす

古禮には三虞ともに柔日を用ふることなり甲丙戊庚壬を剛とし乙丁己辛癸を柔とす虞に柔日を用ふるは幽陰安靜に取れるなりかゝれは葬も柔日にするはつなりされともこれらはよろつ禮のゆきたらひたる上のことなり今に於ては日の剛柔を擇ふまてに及はすたゝ親の神魂を安んしまゐらせてむとおもふまゝ心もてまつるを旨とすへきなりさてその祭に臨むには主人以下まつ浴してその身を潔うすへしもし時刻後れて暇あらすは盥頮するまてにてしかるへし但喪に居るか故に髪を櫛らさるを禮とす執事者たらひ水瓶手巾おの〳〵二つを

靈座の次の間の下の片隅に置くその上なるはたらひも足高く手巾も架にかけてあるへしこは主人と親戚との手あらふところなりそのたらひの足低く手巾も片木の上にあるは執事者の手洗ふところなり香つくゑは靈座を距ること大よそ八九尺の所に置き上に香爐香盒燭臺花瓶を設く主人以下みな出てゝ男女左右にわかれ靈座より左を男子の位とし右を女子の位とし男位はおのれの左を上とし女位はおのれの右を上としおの〳〵香つくゑの前に靈座に向て座をしめ服もて別をなすなり服重きものは前に居り輕きものは後に居り尊長は上に座し卑幼は下に座すその時主人立て手を澡き靈座の前に詣り宝の蓋を擧て神主の背に置き香つくゑの前に退き香を焚きて禮拜すその席にあるものみなともに拜すへし主人起ちてみつから初献をさゝけて几上にそなへ少しく退き拜して謹て虞祭をすゝめ奉る乞ひ願はくはうけ給へと默念すへしその時執事者手を清め一人瓶子の臺を捧け進みて主人の前の右の方にするゑ退く主婦足うち折敷を持ち主人の左に出て跪き初献の盤のかはらけ一つを取り折敷に載せ（執事者一人したみの臺を持ちいてこの土器の載りし臺の左に置く）右に居向き主人の前に置く主人右手に瓶子を

取り左手にてくちを開き臺におきその手を添へ酒を土器に斟みくちを蓋ひ瓶子を臺に還す主婦左に居むき初献の盤なるかはらけをとりしたみの臺に移し右に居むき斟みたる土器の折敷を執り左に居向き土器を初献の盤に奠きさて折しきを執り右に向ひ少しく退く主人拜すこれを初献の一度とす主婦少しく進み左に居むきしたみの臺なる土器ひとつを折敷にのせ右に居むき主人の前におく主人酒を斟むこと初の如し主婦左に居むき盤上の土器を取り酒をしたみに移し右に居むきあらたに斟みたる土器の折敷を執り左に居むき土器を盤に奠き折しきを執り右に向ひすこしく退く主人拜すこれを初献の二度とす三度の儀もこれに倣ふへし三度終る時主婦前の如く盤上の土器の酒をしたみ初献の折しきに置き初の土器二つをも一つに重ねて取て盤上に直す主人拜して初献を徹し入る瓶子も同しく入るへしたゝしたみのみその所にあり次に二献をたてまつり終て三献を薦め參らす皆この儀に同し肴は魚鳥に限るにあらすへ煮むし麥ちまきやうかんやうのもの皆薦むるなりたゝ魚鳥の添さかなある雜し三献の儀終りて子女をして茶果を薦めしむるもよろしさて宝の蓋を掩ひ退き拜すその席の諸親皆拜すこれ祭の畢也この後一日を隔てゝ再虞し又一日を隔てゝ三虞すること異朝古禮の常にしてその儀みな始虞に同じ今こゝもとにては前にもいひし如く再虞三虞は必しも日の剛柔を擇はす俗間常に用ふる初七二七なとにいとなみて難なかるへし

今の俗貴賤高下を問はすおほむね七々百日もて治喪の節とすこれ佛氏に因ると雖も或はむかし遣唐使の見慣ひ來りし唐朝の習ひならむも知るへからす開元禮三日成服の註に古之祔在卒哭今之百日也とも見え又李習之か去佛齋說に深く佛家七々の說を詆れりこの二說を見れは唐俗の喪多く七々百日の祭をなせしこと明かなりさきにたま〳〵趙翼か陔餘叢考に載せし所を見れは七々の設け唐代に始りしにはあらす元魏北齊の頃にや起りぬらむ元魏の時に方ては道士の教極めて盛なりき道家の丹を練り北斗を拜するおほむね七々四十九日をもて界限とす恐らくはその法を推して終りを送るに用ひつひに七々の制となりしならむといへりさもあるへし釋といひ道といひいつれめてたしと覺ゆるにはあらねと七々の數に至ては天に七政あり人に七

情あり聲に七音あり色に七色あり新喪の祭にこの數を用ひむことあなかち非とすへからすまして禮經の虞卒哭のこゝろにてこれを爲すさらに不可なかるへし

檀弓に是日也以虞易奠とありすてに虞祭する時は朝夕の奠を廢するなり異朝の禮初終より葬りまて三日の間朝夕奠を設けし故に既に葬りては虞祭もてその奠に易へふたゝひ奠せさるなり今報く葬るの習はしにして虞祭の後たゝちに奠を廢せんは心に安からすおほゆされはたとひ虞祭は終るとも七々まては朝夕奠をは廢せさるへし司馬溫公云く三虞之後今人或有猶朝夕饋食者各從其家法とこれ甚た人情に協へり

卒哭

卒哭とは時ならさるの哭を終ふるの義なり異朝にては三虞の後剛日に遇ふて卒哭の祭を設くる禮なり剛日は陽なり卒哭の祭に陽日を用ふるはまさに祖に祔せんとするかゆゑにその靈神發動の意にとれるなり今こなたにては虞祭の後必すしも剛日を用ひす假滿の期も逼りぬれは七々をもてこの祭になそらふへし神主は前日善書の人に請ふて題すへし服はけふより受服に改むへし卒哭の祭は成事といひてこれより喪祭をあらためて吉祭とすることなれはその儀は虞祭の如くにしてやゝ吉禮を用ふへし其饌も虞祭よりや重きをあたれりとすその日夙に起きて執事者饌品を用意し盥手の具を備ふる虞祭の條に述るか如したゝ初め神主を出し香を焚き拜するの後執事者手を淨め一人手掛をさゝけて靈座の前の几上に置き傍に退き俯伏す主人再ひ香を焚き拜し謹て成事をすゝめたてまつる明朝まさに王父君に祔し奉るへし乞ひ願はくはうけ給へと默告し身を興す執事者同しく身を興し手掛を下け退くつゝいて一人引渡をさゝけて手掛をそなへしところにする傍に俯伏す主人香をもらすして拜し身を興し起ち次の間に至り用意せし初獻を取つくろふ執事者そを見合せて引渡しを下くへし三獻の次第宝を蓋ふの式並に虞祭に同し

卒哭は喪事の一大節なり三年の喪君大夫卒哭してみな王事に服し期の喪卒哭して政に從ひ小功卒哭して元服の禮を行ひ妻を娶るへし

異朝の古禮には卒哭の祭の後尸を餞するの儀ありこは明日その主を廟に祔せ

ゐとするかためなり今祠堂住居のうちにありかつ尸を用ひたれは餞禮は爲すに及はす

祔

祔は卒哭の明日取り行ふ祭の名なり祔の字義は猶屬と云はんか如し死者の神主を昭穆の次第に從ひその王父の廟に屬して王父と共に祭る也蓋し新死者の魂を上祖考に同しうして神靈と崇むる也檀弓に殷練而祔周卒哭而祔孔子善殷と云ふとあり殷人急にその親を死せりとするに忍ひす故に小祥の前遽にこれを引て先祖に同うせす周人とくその親を神靈と崇めんとを欲す故に卒哭の後遠にこれを引て先祖に同うす二つのものおの〳〵その孝を伸へ誠を致すのわさにして厚薄あるにはあらすしかるに急にその親を死せりとするに忍ひさる深く人情に協へるをもて孔子殷人をよしとし給へり孔子のよしとし給へる所なれは祔祭は殷禮によりてこそ行はまほしけれと後世殷禮の詳かなること得て聞くへからす故に溫公書儀文公家禮も皆周禮に從ひ卒哭して祔するとに定められたり又本朝にてはいにしへより神道を重んするならはしなれは周人に倣ひとくその親を神靈とする殊に宜しとすへしその祭禮はいま廟なけれは祠堂に於てすへし饌を具ふることは卒哭に同し質明とく興て主人以下靈座を拜し祠堂にいたり先つ中央に卓を設けその左の方に少しひき下けて別に卓を置く香案の設けは虞祭の時の如くなるへし（中央の卓を去ること八九尺なるへし）さて新主を祔せんとする祖妣の宝をさゝけて中央の卓上に置き靈座に立かへり新主をさゝけて再ひ祠堂に至り左の卓上に置き男女おの〳〵位に就くこと虞祭の條にいへるか如しさてまつ祖妣の主を出し奉り次に新主を出しまゐらせ主人香案の前に退き香をもり拜する時男女みなともに拜すへし手掛ひきわたし三献を進めまゐらするも祖妣を先にし新主を後にす執事者手掛を祖妣前に供へたてまつる時主人再ひ香を焚き今日御孫某を御側に祔しまゐらす因て謹て酒饌を薦め奉るこひ願はくはうけ給へと告け新主の前に供ふるとき又香をもり今日御祖妣の御側に祔しまゐらす因て謹て酒饌を薦め奉るこひねかはくは饗け給へと告くへしこの後の儀節おほかた卒哭の如しその終りまつ祖妣の宝を蓋ひ次に新主を納て男女皆ともに拜しさて祖妣の宝を故の處にをさめ新主をその左方に

安んし奉るへし

萬斯同云く古之祭考妣者獻考則不復獻妣蓋禮統於尊猶之燕饗之禮與席者雖多而其獻賓止一人而已此古禮也亦溫公文公之禮也豈有既獻祖考復獻祖妣既拜於祖考之前復拜於祖妣之前者乎とこの言に據れは祔祭に三獻九度を侑めゝ參らするはたゝ祖考の前のみにして祖妣と新主には初獻の三度をたてまつりあとは獻備の品はかりにてやむへし

祔は新主を廟に入れて主父に屬するの祭なり儀禮及ひ禮記皆一と度祔するの主を奉けてもとの靈座に反るの文なし溫公書儀文公家禮の祔し已りて後新主をさゝけて靈座に還るは鄭康成の說に從へるなり鄭氏の說溫文二公の從ふ所なりと雖もその何の據る處を知らす且諸家の辨駁する處その理も亦明かなり陳祥道か將葬而既祖柩不可反孰謂將祔而既餞主可反乎といへる呂大臨か禮之祔祭各以昭穆之班祔於其祖主人來除喪主未遷於新廟故以其主祔藏於祖廟有祭即而祭既除喪而後主遷於新廟といへる萬斯大か卒哭之明日祔主於祖廟自此而往不返故卒哭後更有餞猶人之遠行而餞之也先儒謂祔後復反於寢然則何庸有餞乎といへるか如きみな祔主寢に反るの誤を正すに足れり

されは今祔祭し畢り神主を反さす靈座を徹するを宜とす

雜記に男子祔於王父則配女子祔於王母則不配とあり配とは王母を并せ祭るを謂ひ不配とは王父を祭らさるを謂ふこれ尊者の祭は卑者に及ふへく卑者の祭は尊者を援くへからさるの道理なり

孫は必す祖に祔し孫婦は必す祖姑に祔することはいにしへ宗廟の位に昭穆ありて新主昭なれは昭廟の主のみ遷して穆廟に事なく新主穆なれは穆廟の主のみ遷して昭廟に事なき爲にこの禮あるなり後漢以後別廟の制なく同堂異室にして祖考盡く一所にあり本朝にてもむかしは昭穆の沙汰もありつれとも今はなしされは今こなたにて深く昭穆の例に拘はるは變通を知らさるなり故におのれは父の喪には曾祖考妣に祔せすして親しく祖考妣に祔し母の喪には父猶世にまさは祖妣に祔し父うせ給ひての後ならはたゝちに考に祔する古禮に戻るといへとも人情に於て近しとおもふなり開元禮の祔祭は古禮に泥ます三代を并せ祭れりこれも亦義をもて起すものなり孝子そのこ

ゝろの安き所を擇ふへし

暇滿

暇滿は今の忌明なりあらいみとけたりとも服の名ある間は全く服を脱くの理なし王事國事に從ふものは成服の條に云ひし如く受服を着て勤むへし慶弔の事俗に從はさることを得すと雖もまたおのつからその心得あるへし宴會酒席の如きはふつに赴くへからすあつかるへからす

受服本藩の制もていはゝ肩衣羽織袴みな薄墨に染めて紋はなかるへし羽織は緒の色もて位階を分つへき也給人以上はその緒白給人以下はあさきその下は黑なるへし

小祥

小祥は十三ヶ月にして行ふ祭の名なり初忌日を用ふへし祥は吉と訓む虞は喪祭なり卒哭祔は吉祭なり小祥はいよゝ吉也しかれとも大祥にくらふれは未た全く吉ならす故にこれを小祥といふその祭りの前日主人以下みな沐浴し髮を櫛り爪をきりみつから祭所を灑掃しをなこは主婦よりはしめて祭器はいふに

や及ふ鍋釜に至るまて洗ひ滌き務めて清潔を盡し祭饌を具ふへし事を行ふは卒哭の禮に同したゝ心中に念して日月とゝまらす奄に小祥に及ひぬ謹て酒食を薦め奉るといふへしこれ小祥とはいへとも本朝の制として父母の喪もこの月にして除くことなれはすへて異朝の大祥の制の如くなるへし

雜記に祥主人之除也於夕爲期朝服祥因其故服といへれはその前夕より吉服を服し翌朝の祭りにその前夕の服を着るへし

この祭はてゝ後五世以上の親つきぬる神主あらは上の間に卓を設け神主を置き饌を供ふること朔日の儀の如くして心は窮りなしと雖も禮制限りありこれより永く祧し奉るへし感愴にたへす謹て酒果を供へたてまつると告けさてその主を匣に約めて祠堂の壁にかけ置くへし天子諸侯は祧主を太廟の夾室に藏ること禮なり大夫士祧主の事禮經に明文なし今士人の家に祧主を置くへき所なけれは墓所に埋むへしといふ說あれとも甚戚ましきわさにして爲すに忍ひす故に匣に納めて祠壁にかくるの說を爲すものなり

禫

禫は服を除き常に復る祭の名なり禫とは澹といふにおなしく平安のこゝろなりといへり士虞禮記に中月而禫といへるは大祥の月なりともいひ又大祥より一月を隔つるともいひて諸家の說まち〳〵なりそのあけつらひは今しはらく置くこの祭三年の喪のみならず期の喪にもあるなり雜記に期之喪十一月而練十三月而祥十五月而禫の文あり練は再度の受服なり鄭註に此謂父在爲母也と見ゆこれは禮經母のために齊衰三年なるを父の尊いますが爲降して期の喪となす也今本朝の喪制父母の爲に期なり古禮父の尊いますかために母の喪を降して期の喪となすと聖人の制父母の喪三年なるへきを今國制のあるかために俯し就て期にしてやむと同し義なれは雜記の說に從ひ小祥の後一月を隔てゝ十五月めに禫祭を薦めしかる後に常に復るへし（その祭儀は小祥に同し）たゝ喪大記に禫而從御とあり問傳に禫而飲醴酒始飲酒者先飲醴酒始食肉者先食乾肉とあれはこの祭りはてさるの前は服を脫といへとも酒のまず肉食はす寢を復すへからす檀弓に是月禫徙月樂といへれは樂をなすは十六月の朔より始むへし

忌日

いにしへ四時の祭の嚴かなりし世には忌日に奠獻の禮なくして但酒のまず肉食はす樂きかす哀みを致して變を示せしのみ也世下りては人多く四時の祭を行はすたゝ忌日のみ祭を設くその四時の祭を闕くは非禮なりと雖も忌日に奠を薦むるは人情にかなへり效はすはあるへからす但祠堂の內にては衆尊者の同しく據り給ふ所にして獨り享け難き心あれは必すその主を中堂に出しまゐらせてさて祭りその儀は禰を祭るか如くなるへし（此儀祭禮說に詳かなり）その祭祀の魚肉は賓客あらは進めてよし家のものはもとより蔬食するなり服は常を變して墨衰なるへし

眞西山か讀書記に前世名家嫁女其篋中有墨衰一稱以爲忌日慰舅姑之服可法也と見ゆむかしは婦女といへとも猶かくの如しいま世まず〳〵下れりとはいへと禮を好める君子は常に墨衰一具を備へて內には忌日の服として外には親戚の弔服となすへし

凡そ祭の禮は皆吉服して福を飲み胙を受ることなり然るに忌日の祭は墨衰して吉服せす蔬食して福を飲ます胙を受けすおほやう喪の祭と同し故に今

喪禮の末についてつ

聞喪　奔喪

他國にありて父母うせ給ふとつけ來らはまつうちなきてさて使にありしやうをたつね問ふへし歸國することわかまゝならは身の裝そく常をかへすこしも花やきたる物を用ひす打しほれたるさまにて道をいそくへし奔喪古禮に日に行くこと百里（大凡今の十里にあたる）夜をもて行かす哀戚すといへとも害を避くとあれとも今太平の世のかたしけなさ四方の海波靜かにして五畿七道のあひたにいつれの道か夜行くへからさらむされは古に泥ます夜を日にかけていそき路次に滯るへからすたゝ船路はみたりにいそくことなかれ危ふし家に歸り入りなはまつ柩前にいたり拜して哀を盡しさて家人と相ひ弔ふへし家に歸りし後四日服を成すといへれとその服とゝのひなはすなはち着るへしその歸り至る葬禮すみての後ならはまつ墓所にまゐるへしもし故ありて歸國することならぬ旅ならは上の座に香燭を供へ朝夕禮拜して哀みを致すなりもし本國の家に子孫兄弟なくは旅なりとも日ことに朝夕奠を具ふること儀の如くすへし

返葬

父旅にてうせ給はんにその子もし旁にあらは初喪の禮家にある如くつとめて棺に斂めまゐらせ柩にしたかひ國に返るへしもし家にありて父他國にうせ給ふと聞かは旅よそほひ奔喪の條にいひしか如くとゝのへていそきその所にいたりよくしたゝめて柩にしたかひ歸るへし返葬の棺はその造りやう殊に心を盡すへしちからあらむ人は前の造棺の條にいひし如くしたゝめてその上をさらに厚さ一二寸の材もて今一重外棺をつくり内外をかの煉脂もてぬりその内棺とのあひたは綿衾もてつめ外の裝は乘物に擬して作り舁く杠も一條にして上をは白布もておほふへしその所發足せんとする前の日の夕奠にあすなん故郷へ御供申すへしとつけ奉り供そろへ式の如くして柩を出しその身は柩にそひて徒歩にて一里はかりも行てそれより馬乘ものにのる心に任すへしとまり〳〵にて屆かむ程に朝夕の奠をそなへ故郷すてに近つきなはいつの日いつの時に到着あるへしと一族のもとへつけやるへしその日には一族も家より一二里の間にいて迎へそのあたりに寺院なとあらはそを假りて棺を待ち參らせし

はしとゝめておの〳〵香を焚きて禮拜しそれより家にともなひ入れまゐらせさて式の如く送葬すへし今の人まゝその親を客地に葬らむことをはゝかり便易をはかりて火にやきその骨を取り歸り葬るものありこれ大なるあやまりなり孝子死につかへまつること生につかへまつるか如しといはすやその親のつゝかなくまさむときにその御身を疵つけ傷らんには大逆無道の誅のかるへからす今うせたまひたれはとて人もするそとて火を執りその肌體を焚き壞しまゐらせむことこれを何とやいはんたとひ不孝の子ありてその親のなきからを野やまにすてゝ鳥けたものについはみ食はしめんも猶みつからやきそこなふものに愈らすや釋氏火化の說久しく世に行はれ習慣して常となり見るもの曾て怪しみを爲さすたゝ市井の細民これを行ふのみならす士大夫も亦これをなすものあり昔し先王孝道に依りて禮を制し給ふ士大夫そを奉し身を立て推して民を化せんとすこれをいかんそ便易に就てその禮を棄るやたゝ禮を棄るのみならすその親を舉てこれを棄つ淺ましといふもおろかなりかの延陵の季子か旅にしてその長子をうしなへる骨肉は土に復り魂氣はゆかさる所なしとて

つひにその所に葬れりしを孔子禮に合へりとのたまへりされは道遠く財乏しく歸り葬ること能はすはすなはちその所に葬るへし猶火に燒くにまさること遠し

居喪雜儀

曲禮に居喪未葬讀喪禮既葬讀祭禮復常讀樂章とあり喪禮とは朝夕奠朔望奠小大斂及ひ殯葬等の禮を云ふ祭禮とは虞祔卒哭祥禫等の禮なり死を送るの道喪禮より大なるはなし故にその誠信を致して悔ることなからむとて葬の前必すその禮經を讀むことなり死につかふまつるの道祭禮より重きはなし故に追養にその嚴なることを致さむとて既に葬るの後また必すその禮經を讀む也復常とは禫の祭のはてし後を云ふ喪に居ては樂をいふへからすこゝに至て始めて樂書を讀むへし

檀弓に大功廢業或曰大功誦可也と見ゆ業は身に習ふ所の事をいふ誦は口に習ふところの事なりこのこゝろをこなたにていへは五月以上の喪はしはらく學藝をも廢すへし三月以下の喪には讀書は苦しからさる也

雜記に三年之喪言而不語對而不問とあり言はおのれの事をいふなり語は人の爲に物かたりする也父母の喪にはおのれの言はて叶はぬことをいふまてにて人と物語りするに至らす人の問ふにはその對へのみしてこれよりもの問ふことあるましきなり又喪服四制に齊衰之喪對而不言大功之喪言而不議緦小功之喪議而不及樂とあり齊衰の喪には人に問はるゝ事あらはたゝその事をこたへて餘事に言ひ及はさるへし大功の喪には餘事に言ひ及ふも人と論議問答すへからす小功緦麻の喪には人と論議問難するも樂の事に及はさるへし

雜記に疏衰之喪既葬人請見之則見不請見人とあり重喪の内といへとも葬の後には逢たきよしを申しいるゝ人にあふこと苦しからすたゝ是よりゆきて人に逢ふことを請ふましきなり

喪服小記に養有疾者不喪服養尊者必易服養舁者否と云ふことありこれは身に喪服ありて親族の疾の看とりする時のこゝろ得なり病者の爲には生けらむことを求めて吉を主として凶を惡むか故にその喪服を常服に易ふる也されとも

をしなへてしかするにはあらす子弟の服を服して父兄の看とりせさるのみ父兄の服は子弟のために易ふへからす

墓碑

墓碑といひ墓碣といひ墓表墓識墓版なといふその稱ことなれとも皆おなしくはかのしるしなり墓にしるしの石を建てゝその生卒爵里行實をしるすこと異朝にては漢代をはしめとす本朝にてはさらに後の世に起れり今なへての習となりぬれとその行實をしるすはまれなり近き頃に及ひて和漢のまなひあるもの多くは墓碑のふみ作りてその功德を褒賛することなりされとその人果して賢ならはもとよりひとの稱頌する所となりてよゝにかくれあるへからす碑誌のふみを待てはしめて人にしられなんやもしその人はたして不賢ならはたとひ巧言もて强てその采飾を極めたりともいたつらに譏笑の資けとならむのみたれかはそをまことゝしうけんされは墓のしるしにはたゝ某姓名君墓表と題しその夫婦合葬せるには某姓名君曁配某氏墓表と刻みてその賢としからさるとは世人の知るにまかせたらんこそよかるへけれ元の趙孟頫はみつからその父母及ひ祖父母の墓誌をつくれる僅かにその生卒爵里を叙せしのみにてその

行事に及はす見識頗る高しといふへし墓碑も異朝にては品秩の高下によりて大小の掟あり本朝にはむかしより定れる制度なしされとおほやう闊さ一尺厚さその三分の二高さは二尺五六寸より三尺までにて趺は方二尺二三寸厚さ七八寸なるへし座棺ならは趺もてその棺の上をおほふやうにし臥棺ならは趺をその足の方に安んすへし

影　像

體を藏むるものは墓なり神を棲しむるものは廟なりその神を憑らしむるものは主なりその容を留むるものは像なり祖考の像を繪いていつきまつること古禮になしといへとも今の世となりては祭るに像を用ひさるものすくなしこれまた人情のやむことを得さるに出るものなりたゝ宋の伊川涑水横渠晦菴諸先生古禮に見えさる所なりとて取らす木主魂帛をのみ用ひられき竊にそのこゝろを察するに影像の設けは道釋二氏の專ら爲す所なれはそに同しからさらむやうにことさらに情を矯めて取られさりしと覺ゆる也ためにする所ありて情を矯むるはその心狹く二氏の爲すところなりとてよきことまてを棄るはそのこゝろおほやけならす況や圖形の設けその來る事久し商王の傅說を厥象に審かにせしめられたる漢帝の功臣を麒麟閣に畫かし給へる文翁か聖像を講堂に設けたる經史に見ゆる所誣ゆへからす何そ二氏のみ像を設くることを爲さんされは影像の設けはもとより二氏の嫌にわたらすたとひその嫌にわたるも善きことをまねはぬことはりやはある親のうせ給ひて再ひ見るへからさるは子の心にはいかはかり悲しからましさるを影像の設けありて歲時の祭祀に一たひそを披けはとしつきの久しきを經ぬるも儀容さなからこゝにいますか如く思慕のこゝろもこれによりて又ます〳〵深かるへしさらは影像はかり追孝の助けとなるへきものはあらし心あらん人は廟墓神主と同しくこゝろして設けたき祭の折〳〵神主のうしろに掛くへし

漢土の畫工は多くは寫眞の法に拙しおのれ三十年こなた古今人の肖像を見る二十品に下らすおほかた明清の善工に出るもの也しかるにその形神多くは缺けていける人の面貌に似すこゝに知りぬ程子の一髭髮あたらされはすなはち別人といはれしあなかち嚴しきに過きたるにはあらすその寫す所多くその眞

に似さるかためなることを寫す所果してその人に似ることなくはいかてかその人として祭祀の誠をは盡すへきもとより木主を用ふるのまされるにはしかす西洋の人の如きはむかしより繪の事に巧にしてかつ理學器學に老いたりその寫眞に用ふるの具すてに闇室明室の兩器ありその眞を寫さむとするものは必すこの兩器に就てうつすなり故にその傳ふる處骨格の起伏雛紋の隱現こと〳〵く用筆の間にあらはれてその形神のいける人に遠からさる迥に漢人の爲す所の上に出つ近頃創製せる留影鏡に至ては人の一筆を煩さすして寫りぬる影のまに〳〵そのかた長くこゝに留まることなれは一髭一髮を殘さすその神氣を並せて生人と毫釐の異なる所なしまことに天地造化のたくみを奪ふといひつへし程馬諸公をして今の世に遭はしめはなとかはこの眞影を取られさるへき

象山先生詩鈔

原本上下二卷明治十年の出版にて詩の粹を拔きたるものなり略ぼ年代によりて配列し天保十年（玉池時代）より安政元年（木挽町時代）迄を上卷に收め安政元年（聚遠樓時代）より元治元年（上洛時代）迄を下卷に收む批評は大槻磐溪中村敬宇の施せるものなり倘ほ山階親王の『淺間山けふりと消えしその人の名こそ雲井に立ち殘りけれ』の題歌及び山岡鐵舟勝海舟の題詞中村敬宇北澤正誠の序山寺信炳小林虎三郎子安峻の跋は此れを省略せり

象山先生詩鈔卷之上

門人　信濃　北澤正誠子進編

東遊紀行

磐翁曰子明既決以下不署名者盡係磐翁評語

終身之業矣

驥神馳千里鶴念在九臯人而無大志豈不恥羽毛奮發求至道促裝興翔翮辛苦期報國自誓此心牢

敬句可爲吾起四人座右箴

予以丁酉秋乞遊學之暇戊戌冬始得允今茲己亥二月征裝粗辦乃以十二日啓行

阿孃雖有訓臨別淚縱橫晨昏闕定省菽水衰養榮雖然期非久勉强須安情都下卜新居板輿我將迎

訓曰篤實

有此女丈夫之言子明其不以大丈夫自期乎

志道勤苦進德雖在千里外吾之慶猶在吾膝下也如其志行凡陋與儕俗等夷雖甘旨極養扶携致勞吾不樂矣

駕言發山麓送行滿路岐欲答友誼厚聊爲陳茲詩行止雖殊道使尼各有時此別休惆悵勵志共心期

故舊子弟百餘人送予於西郊禮意甚殷

文師結草菴々々古城曲門種一株梅窓移數竿竹爲懷渴饑情今夜此投宿多謝

送者百餘人何其多也亦足以卜子明平生友愛矣

故舊意談笑屢更燭」文師字鳳山別號竹菴皷琴善華音隱於上田城南常田村予嘗學華音於師最蒙愛遇是夕投宿其廬師大喜手供酒茶晤譚歡洽應酬綢繆不覺夜漏旣闌。嗟哉我何人一文興兩英兩英遠候我。侵晨出春城道左不相逢憾然難爲情明朝應疾邀與共話平生」予往以與本田伯楙論學術書寄上田醫官林大輝許其友加藤子成傳而讀之有所奮發與大輝益研究正學是日聞予上途相將俟予於城北二里敬宇曰轉接處每佳外情誼亦至而道路相左竟不遭逢聞之於文師之言慊憾不堪。晨起盥漱罷忽聽跫然響倒屣迎相拜執手慰快々正學頹敗餘何幸得斯黨自此有輔翼不復怯魁魎」翌朝日未昇大輝先至尋而子成亦來弟勵次從焉相與講論道義其說多與余所見符歡喜何可言耶。世道日衰竭天理幾泯沒人々迷徑蹊動輒致顛蹶君家傳神方收功非恍惚」願言爲天下一整萎蘺骨」是日午後與子成兄弟同遊于大輝依仁堂又論正學大輝家世傳整骨之術名譽振於遠近云。昨夜宿依仁今日遊松園把酒話所見符同欲忘言故舊夜來至驚喜更斟罇歡情未云畢東窓上晨暾」十四日遊松園加藤氏所居也園皆樹松新翠照人如濯是夜八木山田二兄來會有致知格物鳶飛魚躍之論笑言達旦臨去用壁間之韻賦一詩留別子成詩云立身豈被世風靡行道不關人口嗔王霸事

署通實語義利公私盡日論注想由來孔孟室入頭只有程朱門臨別慇懃但努力愧將浮誕在文園。主翁字垣甫經業舊所欽過門得晤言懽然愜素心却承次子託悚惕政爾深易教雖古道末學奈不任」垣甫子成勵次之所生嘗受學於林祭酒先生蓋上人不我棄三日伴吾騎吟詩信口和行酒殫情醉非公交友深。詎有情誼備耿々何時忘清宵勞夢寐」專精寺空山上人爲余舊詩友是行送余至上田逗留三日今朝又送別於郊外道上惠詩云客路春深杳眇間吟鞭又叩翠霞關請君自慰羇中思去對芙蓉舊識顏予和云欲別躊躇立道間暗愁無意和陽關芙蓉雖是舊相識不似家山諳熟顏。淺嶽吐黃烟宛似蘸香鼎溟濛起雲雨晻藹遮日景開闢幾千年間斷無少頃有本者如此仰望知所省」轎夢忽覺身已在追分原地勢較高無復長林連披而東北望淺間嶽於青雲之端亦足快心目也是夕宿追分驛。驅輿下碓氷感觸發吾志沃野千里開杳渺與天際培塿不遮目遊矚極清快度量得似此豈難容群類」十六日發追分道沓掛經輕井澤登碓氷嶺至絕頂東北平古人云高山大野激發志氣信有以也哉。關外一矯看靈山鬱嶙峋仙聖時降集宿昔所」有此曠世之懷日本武尊獨無慨於吾嬬夫之言乎

古樂府餘韻又云以詩論之此首爲壓卷

緬聞丹臺留隱訣紫府藏秘文學手謝世人從此棲白雲山妙義一曰白雲山距横川關二里而遠危峭偉拔爲關東奇觀雜書載曾有仙人住此

風薰々林梢月皓々奈何羇旅生吟賞易草々欲折附驛使佳人在遠道自坂本至松井田道間梅花盛開

誰料出碓關又宿斯驛雪虛枕簷溜響寒林風威冽中夜屢驚夢起座空愁絶迴想象山畔雪竹幾竿折是夜宿松井田夜半雪大下

雨雪失春意忽怯征衣單景昏禽語苦風卷樹聲寒泥行幾里程前路尚漫々板轎吟座客亦知行路難七十日雪未晴寒風殊勁轎裏擁爐不復窺窓外入夜至深谷驛雪歇天霽月亦昇得一小詩云月出轎窓前眠醒轎窓裏轎窓似齋窓但少梅影耳

修塘進小轎自似遊覽客左望筑波岑右眺富士嶽況又陽春候紅綠轉粲錯斯行若奉母中心更幾樂十八日夙發深谷過熊谷塘日麗雪洋風色可喜亦足忘疇昔之苦艱因念使阿孃觀此富士筑波之景其歡當如何哉此夕宿浦輪驛

足自然不爭長中間日月旋麓底風雷響奇特已如此孰不致

敬宇曰一篇七百六十言

弘化元年此註全象山集編纂委員の補ひたるもの以下最上の欄の皆の然り

叙景抒懷曲々入妙頗似東坡寄子由五百言而襟抱之大更過之

當時吐此論唯有子明與余耳夫子明貴先見今日開明尚有懷大惑者可歎也

敬宇曰畢竟大惑今猶不醒也浩歎

欽仰今日入江門座覺天宇寬生徒已無恙僮僕亦喜歡忽憶簾幃情又回轎中看記行附置郵聊以報平安十九日自浦輪過板橋入江都

○讀洋書

漢士與歐羅於我俱殊域皇國崇神教取善自補翊彼美固可參其瑕何須匿王道無偏黨平々歸有極咄哉陋儒子無乃懷大惑

寶劍歌

大鹵精金棠溪上化淬功成欲騰空楚闕崇一固不啓虎吼時起玉匣中我友通士解緯象獨知寶氣徹蒼穹一朝得之持相示使人忽然豁襟胸星文霜華利吹毛秋水寒凝碧芙蓉神光照室夜不暗百邪千妖遠絶蹤我欲乞去口未言精神先旺膽氣雄吁爾平生片心能贈我直跨東海斬毒龍

是子明本色然非其至者

無題

大孝之子眞豫之士安在我將求之於無何有之鄉

澆風散古道。人情日譎詭。赫々天日下。行立半狐鬼。割股廬墓側。未必是孝子。奬車駕羸馬。未必是廉士。所以阮步兵。白眼世人視。

玉池寓居

是蓋參玉池吟社詩以其有星巖口氣也

天保十三年

阿玉池頭避熱塵。畧無寵辱到茲身。移花洗柳閑生計。待月迎風舊主人。披卷豈無千古友。傾尊自有四時春。世間利勢何須問。這裏收權殊不貧。

有一鳥下于南庭。羽毛淺紫。長喙而黃足。其大如母鷄。狀頗似鶉。臆前有白圓點。背上成波文。予生北地。目未見鷓鴣。然按圖經考之。恐是邪。

北人始見南禽貌。毛彩不羣堪品評。背上浪紋雲錦麗。臆前圓點雪花明。汨羅廟畔曾開翅。孤竹祠邊定喚名。吾志久知行不得。不須苦作斷腸聲。

古遺愛生以魯公爭座帖爲贈賦答

最愛平原忠義餘。天眞爛熳有誰如。野人久已厭拘束。不學嚴家餓隸書。

讀醫書

夙通脉理張橫渠。晚聚經方陸敬輿。我亦中年有所感。時披海外濟生書。

天城山

南豆饒名勝。最稱天城山。欲至無羽翮。引領空朝昏。此日定何日。獨往解襟煩。搴蘿踰巉嶪。躡石度潺湲。岡巒幾疊層。苔徑欲千盤。悄蒨絕人境。古木挂吟猿。冢頂一遊目。紫翠下周環。滄海

渺無際。但見白雲屯。丹闕應非遠。金城欲及門。靈秀愜幽賞。退想陋九寰。忽焉欲遁跡。無奈綱常存。搔首向前路。振袂下巑岏。

晚過函嶺望西北五峯時凍雨新晴濕雲歸山色如墨染濃澹疊層神變萬狀駭心動目得二絕句

五峯出沒晚雲間。潑墨層々勢欲奔。若使虎兒逢此景。當年不必畫姚村。

淋漓天地好粉本。大米小米學茲奇。妙境平生難數會。嶺頭停轡立多時。

嘉永元年

蟠桃湍 在松代北鞜野山中。方言湍讀如泉。

幽溪十二曲。翠壁千尋餘。雲樹絡葛蔓。日影不窺隅。中有驚湍注。白龍爭奔趨。飛霧如襲人。草木皆霑濡。我來三伏時。暫與炎氛疎。清風吹鬚髮。爽氣滿襟裾。忽見長眉翁。雲端佇軒車。贈我以瑤草。授我以玉書。道緣已非淺。豈爲名跡拘。高揖謝世人。自此遁塵區。

巖菅山 在吾松代治內信中第一高山

靈境違天尺。五更見燭龍。拂雲穿壁洞。捫葛度巖松。東海呑夷島。南天揖富峯。何時解塵絆。振策逐仙蹤。

陶朱公

鼓進平吳不逆天。功成身退五湖煙。中心未捨人間事。也止陶山作富仙。

賴子成

昔日詞場張一軍。雄鷄恰是在雌群。終生不識南豐面。高與小兒談古文。

癸卯首夏歸覲母親。常山山寺兄見餽魚筍。喜而賦詩。呈

敬宇曰神韻悠遠

余嘗有一絕以類錄于此破吳已雪會稽恥安樂何堪烏喙長背使西施蒙不潔五湖秋水洗殘粧

未盡山陽不識南豐子成之幸耳敬宇曰自古地步甚高所以爲大家

之聊申謝悃。

我久客江門。忽聆北闈疾。即日趣輕裝。兼道馳快駟。昏經碓氷巔。霧冥天若漆。曉過小諸驛。落月沉山靄。犯雨又衝風。不寒心惴慄。五百有餘里。跋涉但三日。入門問安否。二豎已遯逸。驚喜拜座前。感泗潸垂膝。意定話平生。彼此各孅悉。母子盡懽娛。融融調寶瑟。懽堂常山別號孩童舊。情交殊綢密。欣我歸覲辰。母恙亦寧謐。玉盤餽鱗鮮。新筍斸露茁。烹飪供晚饌。異香盈陋室。姊甥時來臻。慶喜更洋溢。下筋復進杯。宴嬉何時畢。南山現歡容。蒼翠當戶出。林園帶喜色。花木蒸芬苾。母顏尤融怡。對之笑眸々。人生得此樂。王公安足匹。

荅常山兄二首

落月隱庭樹。漏聲夜正央。交臂話古今。立論服堂々。爲撥宣爐灰。手焚一瓣香。澆茗談轉濃。頻惜夜不長。功利黜霸畧。學術稱帝王。欲速見小利。國脉多遂傷。可嘆用事者。此義惛茫々。納約賡未闢。爲之廻中腸。微力諒有限。敢曰爲世倡。相期從此學。永挹聖賢芳。

敬宇曰先生不物而獨於常人山翁推奬如此足見當時交契之深也

迴游不可及。宛在水中央。之子天資美。才器稱廟堂。機變通武畧。何惟文墨香。雄偉驚儒俗。鐵劍三尺長。心術歸正學。語言道先王。中心勞國事。旦暮懷憂傷。知音又誰在。邦土徒茫々。一詩忽贈我。披誦見肝腸。忠懇已如是。誰不從其倡。維持須努力。不朽貽其芳。

無題

眞簡點也氣象

平生狂志愛會點。世事何須說是非。草堤經雨青如織。墨水春風思詠歸。

與李長吉同情異趣

曉蹋月光來澤陀。炊煙漸颺水邊家。香風吹面馬蹄快。看盡春堤十里花。

蓮詩檃括愛蓮說

草木花甚蕃。噫予獨愛蓮。不染乎淤泥。淨植濯清漣。亭亭宜遠觀。何可褻玩焉。

庚戌初秋偶作

庚戌七月將之浦賀。阻風於靈巖洲。時應下曾禰先生招講新砲學

成事有功世。羈役非所勞。諸子與我諧。追從意氣豪。暮夜命行裝。啓途情已迢。秋晏盪氛滓。粲然星斗高。如何風未便。卷帆送落潮。坐臥守孤樓。欝々竟永宵。譬之懷長策。無媒欲獻朝。延領望天際。浩歎首空搔。

初秋感懷

人壽七八十。我已失半生。鬢邊雖未霜。漸覺減其莖。秋風不復夏。頹日難再昇。及時不騁志。形骸豈無傾。家聲久不振。名冑空伶仃。吾心固非石。念之深傷情。

雜感六首　余以庚戌冬十二月十八日發江都。二十三日還松代。中途得疾。至今不愈。病間得詩數首。差後錄之。

海水環回祥氣浮。龍蟠虎踞帝王州。何時慴服西人志。貢獻象駝交馬牛。

自非心服難防奸。英吉佛郎原傲頑。苦憶漢家王佐相。當年籌策盡征蠻。

東邊拓地三千里。曾效荷蘭設學科。吾邦空說英雄跡。百歲無人似伯多。

火輪截浪疾飛鷹。彼土近來多異能。此去浹旬到龍動。古人今起應疑氷。

生來曾慕萬夫雄。慷慨時々氣吐虹。吾手非無一尺箠。奈何爲

今日距嘉永二十四五年。尚有日出燃燈者。學究不啻爲之慨嘆。敬宇曰。盤翁評先我心獲

國笞羌戎。
聖賢有作順風氣不敢後天存結繩底事世間村學究東方日出尚燃燈。

西郊演礮而遇雨作

讀之亦稱快。

老榴擘山電光開。操演人士呼快哉。聲勢鬬天雲皆去。四山鳴動驟雨來。

辛亥春三月二十二日。將諸子演五十斤石衝天砲於松代城西生萱村。此邊村落皆杏林。往々有山桃間之。開花爛熳。彌望如紅雲。而放巨砲於其間。眞奇景也。

敬宇曰。率直言之。可卽以其氣盛也。

演大砲於杏花之下。事既奇。詩又太佳。可以補杏林杏花壇。敬宇曰。典故等數句。上乘

春野乘晴演大砲。四林桃杏正芳菲。一聲霹靂震天地。萬樹紅花撩亂飛。

讀宋氏風論喜而作

吾年十有五。讀易象山麓。玄夜玩辭象。或時至晨旭。冥會一何欣。理妙照心目。父老嗟其精。友朋稱其確。巖々張夫子。爲學眞卓犖。刻苦着正蒙。兩程互相昺。顧彼巽風說。義類都未燭。如何在後賢。尊奉攀其躅。執異餘二紀。往來在心曲。一朝獲冥符。吾心頓慰沃。射者雖殊科。所尚在正鵠。誰謂萬里遠。神系固相屬。

張子曰。凡陰氣凝聚。陽在內者不得出。則奮擊而爲雷霆。陽在外者不得入。則周旋不舍而爲風。予謂陽卦主陽。陰卦主陰。易之通例也。坎之爲陷。陽陷於陰也。離之爲麗。陰麗於陽也。可以見矣。今張子說雷風。皆以陽爲主。失義類也。而朱子以下來談象者。多取之。予所不解。

諸葛武侯贊

卷中合作韻。脚皆妥當。妙不可言。

大賢秉大器。行藏存用舍。卓哉諸葛公。躬耕南陽下。一朝得其

君再吹劉家火、宏規本禮樂、細事暨流馬、逸躅邈難攀、飛聲塞區夏、千載拜遺像、欽挹我心寫。

讀宋氏宇宙記（壬子）

余誦陶處士讀山海經詩、喜其冲澹深粹、遁然有自得之意、然亦憾其所云終宇宙者止於山海經穆天子傳恍惚恠奇之說也、余嘗病漢士諸賢談論物理、多出臆度、而其失流於虛誕、竊欲救此弊、以西洋實測之言久矣、偶得獨乙人宋墨爾氏所著宇宙記、而讀之、天地之大、日月之明、暑寒晝夜之運、風雲露雷之變、禽蟲草木之微、無一不闡其幽而探其賾、眞可謂綜括宇宙、終始古今者、余甚樂焉、乃以處士俯仰終宇宙不樂復何如爲韵、作詩十首、若其思致拙劣、命辭凡陋、固無足稽、然至其云々者、則竊以庶幾焉、第不識覽者以爲如何耳。

（余嘗於洋學恨不能闡其幽而探其賾）

其一

宿好在詩易、推論折絲縷、勤苦過立年、物理竟莽鹵、遂取歐羅錄、闕漏聊自補、舊暗生新知、深艱披快覩、偶得宋氏書、遍攬造化府、悠々宇宙間、正爾盡仰俯。

其二

燿靈被光雲、黑子露其壤、鼃淵不見水、環山寂游沈、由辣竪其軸、二紀日初上、太嚚具氣海、朝々有昧爽、鎭輪載河嶽、歲道殊氛埃、辰鑣峻嶺竦、惑極雪野廣、星運證地動、彗蝕軌光往、數理推四三、乘星在指掌、發揮本實測、敷宣非誣罔、至哉星天學、咨嗟足欽仰。

其三

金屬飽衆酸。洋々如醅釀。親力促降沈。大塊告成功。澄醪流就下。崧高現其峯。草木甫云暢。介鱗漸已充。乳育生高京。靈秀降其終。山谷有天秩。先後不可訌。貞石存殘形。通人識來蹤。

其　四

伏燬發地底。奮震碎維柱。傾覆易高低。離合變區宇。巨浸自南翻。何山能支柱。駭浪注火坑。激噴作猛雨。傾瀉如飛泉。盪滌剝山土。停砂爲丘壠。塡泥成園圃。今我步林巒。徘徊多所覩。依然山澤間。終古存其武。

其　五

雲漢開素練。亟目辨斗宿。斗宿是燬炎。光明彌宇宙。各在天一方。中處不遊走。塊曜旁旋繞。丸塊亦貳副。但爲相距迥。稠密如積雰。太虛眞無涯。其際誰能究。

其　六

疊々重兩金。鹹滷濡其渴。倏忽生妙力。神氣坐決欝。抵觸盪人臂。烈炎鑠金鐵。眇器今如此。大塊豈其不。山陵積沙礪。石炭橫其跋。氣水相浸潤。神力亦激發。火山噴紫煙。溫泉流素沫。其變或爲震。原嶽時剖裂。觀物鞠源委。患害不難脫。泰西有鄒子。爲我啓理窟。

其　七

氷山凌空秀。嵯峨如刻削。紅碧映日開。奇光遠相射。凝野接凝海。彌望絕林薄。皝黃長不夜。線燿照邱壑。迢々南州川。寶氣璨灼皪。塵金隨清流。人々可採獲。浮木生何許。迺在窮髮北。海客非資茲。何由得飪瀹。逶迤望北光。其樞合慈極。指鍼疾感動。首尾或時易。積氣泛金鉛。坤仁全其廓。東水却鑿齒。墨峽失其弱。

墜果悟鬼帶。刹燈明動則。奔星識太始。地雨辨隕石。得窮上下際。賴有疇人籍。恨不起陶令。周覽共此樂。

其八

湯海出泥山。何處見林藪。炭分迷海宇。黑煙但油々。日月黯不見。誰辨昏與晝。猛火起其間。恠鬼時遊走。地成生毛髮。煤炭得所僦。氣氛漸開明。此景遂不復。

敬字目讀來讀去只贊其妙而竟不能名其所以妙

其九

衆石成水火。水火互相磨。磨盪千萬祀。或化泥與沙。我有照微鏡。精巧使人嗟。持此照石理。燦灼似春葩。燥濕異其觀。粒葉發人多。把石相山質。貧富誰敢託。寶藏從擺闔。山靈如予何

其十

春陵說太極。五材誤其圖。婺源對屈問。暗中手相摹。西儒尚實測。早已破虛誣。茫々覆載間。萬理轉煥乎。我亦同此地。何爲僻一隅。宜會東西言。以作一家書。學奪入骨髓。聞見養空疎。世間少人傑。誰從余所如。

十首深奧精微非固陋如余者所能窺故不敢句句亦能句也不能句句也敬字曰謙如此敬字所以爲翁

天姥山在松江西三里許俗稱姨捨山

天姥山頭秋月明。天姥山下秋水清。夜深好執紫簫管。丹桂花陰學鳳聲。

丁未冬日

冬日宿上田客舍。八木誠之。加藤士成。林大輝等諸子來會。談論竟夕。詩以紀事。

短晷縮西澗。解裝倚行軒。喜此舊遊地。良友倏來屯。命酌各論志。慷慨道所存。精貌改故步。頃年余知漢土之學有所未備因欲會集東西之學以成一家之言。俊策欣新觀。士成見示近日所著叢塚志甚佳。微妙人天理。幽深造化源。吐吞達永夜。不覺清曉寒。

琴興十首 余嘗琴錄著

石牀安綠綺、徽暗未成聲。且聽流泉響、微吟待月明。

膝上謂清徵、目送山鳥飛。枯桐有餘韻、鳥影竟依稀。

孤琴清夜月、聲合溪流響。絕調無人知、琅然祇自賞。

山水失知音、千歲無消息。不遇鐘子期、茲情竟誰識。

遇此新過雨、青林生暮涼。清英未及濕、音調故輕揚。

古洞愛幽深、彈琴伴孤鶴。巖花日夕飄、不是從風落。

雲散松崖碧、月升徽亦輝。爲招稽叔夜、千載尚來歸。

谷風吹夕嵐、峯頂月來早。朱絃煩手登、白石倩僮掃。

空齋夜寂寥、雨雪盈窓牖。燈下弄琴心、天涯懷尚友。

巖上掃青苔、春醪獨自酌。一醉歌南風、琴頭松子落。

擬古

二月之作

敬宇曰無乃夫子自道歟

余有此和韻曰生在州東海寸神丹報國無心狂何奈世人不使仁逢堅利方賞音來利平生執事俗吏無爲高境英雲倚海濤高暗滿襟淚峙爭江嚴能門礮不濤

有魚在北溟。長大絕其夷。首尾各萬里。世人何得知。煦成天下雨。怒作天下遺。掀翻揚波浪。列宿爲蔽虧。身大海猶淺。時々見其鰭。長鯨數有限。難以飽吾飢。託生未得所。何許是天池。

○癸丑春三月偶感示礮學生

未見礮臺環海潯。南風四月甚關心。但教廟署無遺算。應有蕃船報好音。士庶何爲忘德澤。江山亦自惡妖祲。武昌本是咽喉地。可使犬羊窺領襟。

癸丑上巳會飲簡堂詩并引

王右軍上巳爲蘭亭之會。在晉永和九年癸丑。今歲亦遇癸丑。是日之集。豈非勝事。因憶永和八年殷浩北伐無功。再舉屯泗口。右軍移書諫之曰。區々江左。天下寒心。固已久矣。處內外之任者。未有深謀遠慮。天下將有土崩之勢。任其事者。

敬宇曰右軍識超卓所見不度量力謂者豈不弊世獨爲一時歎浩言哉

豈得辭四海之責哉。又與會稽王昱牋曰。不度德量力。不弊不已。此封內所以痛心歎悼者也。願先爲不可勝之基。須根立勢舉。謀之未晚。浩不能從。遂有九年秋七月之敗。頃歲洋夷披猖。朶頤大邦。形跡既露。而不可勝之基。尚有未立者。俯仰之際。不能無感慨。因詩中及之。

良辰修故事。稧飲會詞林。乃誦蘭亭叙。深欽賢者心。去年爭北伐。今日在山陰。勝集雖可娛。回思感慨深。鯨鯢久奔盪。長策乏知音。興懷欲嗟悼。情況何古今。

癸丑仲夏

火輪橫恣轉。江流非是君臣愒日秋。忠義要張神國武。功名欲伐虜人謀。東圻起堵曾陳策。南島賒船盍有猷。兵事未聞巧之久。何人速解熱眉憂。

此詩在賀游浦閣觀楊彼理始入我間年也蓋曰之中志此待送吉而發于義詩也

擬古

駕余將遠征。戒心命從者。遠征知何方。四夷久慢我。將馳騁大塊。流憩米歐野。瀛海多鯨鯢。風浪常翻簸。願一成吾志。歎無木與火。忠義已許國。何嘗失慵惰。

敬宇曰此失意時作悲憤然知其爲作有語道者之言也

癸丑秋自貽

白石清泉入夢頻。情懷久負故山春。才疎無補當今事。不若歸田終此身。

君恩洪大難爲量。特命催吾向故鄉。逖將世上風波險。管領山中日月長。

再自貽

虛名早已誤侯公。猿約鶴盟還作空。行止非人天意在。肯將利害撓胸中。

送吉田義卿 九月十八日

之子有靈骨久厭蹴蹣群振衣萬里道心事未語人雖則未語人忖度或有因送行出郭門孤鶴橫秋晏環海何茫々五洲自成隣周流究形勢一見超百聞智者貴投機歸來須及辰不立非常功身後誰能賓

（是其取禍處 慨俛仰今昔不勝咲詩亦有靈骨又此宜被俗眼白也）

甲寅初春偶作

黠虜今應離故國江門亦已度春風設施未見回天力物望誰當命世雄疇昔戲譚憑呆堞方今急務在元戎（昔者諸葛武侯謂連弩爲元戎今予則以礮爲元戎）微臣別有伐謀策安得風船下聖東

（敬宇曰愚則欲換資字作伸字）

騰尾狂雷已可恂春頭恒懊又愁儂誰言人事罔應感（洪範曰豫恒懊若）不信天心有曲從許國非才難得志憂時無補欲歸農春來未有慰懷處忼慨悲歌獨撫胸

癸丑二月偶感

幾載鯨鯢橫海天中州豫備尚依然孰知兵制隨時變但說軍裝映日鮮運礮未應須我馬守城却或要渠船當今更有無窮事志士何時高枕眠

（敬宇曰憂國心深許國志大洵可敬也勿笑其迂）

戲檃括杜詩詠蒸氣船

蕩々萬斛船影若搖白虹起檣不推牛職由集衆功無待風動天隨意大水中

（句々如爲汽船設者何等奇構）

題蒲田茶舖壁

八隻軍船來聖東江都官吏太倥偬梅花不識人間事依舊清芬唉海風

（敬宇曰意象悠遠）

無題

七道都城似散碁控援未足待戎夷遠謀今日廟堂上莫悔慢藏招盜兒

敬宇曰西洋器藝之精實爲與衰貼安原而得質

東洋道德西洋藝。匡廓相依完。圖模。大地周圍一萬里。還須缺。得半隅。無。

次小林炳文留別韻 甲寅三月炳文論國事獲罪歸長岡

久知天道易推移。家國興衰將問誰。伯紀遠謀人所惜。椒山抗疏世徒悲。一方却敵未知計。四顧稱雄何有期。不揆又遭今日別。傷心萬事付新詞。

獄中寫懷 以下係獄中作

久憂邊事歎天遠。忽墜此中悲海深。欲爲皇朝存至計。敢因吾利勞知音。鷄鳴不已夜晦冥。鶴韻應通蓊欝陰。寄語吾門同志士。莫將榮辱負初心。

不思城下作盟恥。却見忠貞抱忌疑。伯昳議疆長崎澳。聖東假地下田湄。異時輕敵已非策。今日伐謀知是誰。幽憤滿胷無所

敬宇曰僧日蓮後出在牢中言六合之內不覺氣寒吾先生身利害不思隘也以存國氣所之至發詩計謀一浩句欝亮

泄。獄中瀝血寫此詩。

君恩

君恩如天地。國恩如江海。外患今非一。奮身思有濟。勉勵十餘年。何問明與晦。在卑欲爲池。在高欲爲壘。奈何肉食人。頹然若傀儡。苟安愒歲月。般樂敖且怠。當初恃不來。不知恃有待。復不伐其謀。率然爲所詒。假地缺金甌。屈膝甘無禮。反却知彼計。束縛直自累。吝余何爲者。致忠忽遭逮。幽囚在犴獄。甘心待其罪。松柏有本性。歲寒節不改。忠義許君國。百折何曾悔。用間在得人。全勝在知彼。是非不可磨。公論期千載。

敝笱五章 有箋

敝笱在海。魚則唯々。狄人戲謔。笑言有咥。

比也。笱以竹爲器。以取魚者也。唯々出入不制也。咥笑貌。笱

君恩義節自出文並皇國傳山者肺烈中字正可與氣如歌彼文流々首忠奚皇國義歌文

耳免擬太之過未疑

當在河而今在海況其敝壞者安得能取魚哉宜乎其魚之唯々然而出入無忌憚也以比禦侮失策而致狄人之陵蔑也

曾欲御冬亟歸旨蓄莫顧我勞反比予于毒

比也御當歸貽旨美蓄聚也曾蓄聚美菜以爲餽貽不一再者蓋欲使以禦冬月之空乏也以比安不忘危治不忘亂方泰寧之時而深思遠慮以數々然及邊防戎備之事也

其霽々々曀々有霾永言念國不瑕有害

比也其者冀其將然之辭陰而風曰曀雨土曰霾瑕何也冀其開霽而卒不開霽且陰々冷風雨土蒙霧以比衰替之世欲有奮發改革而狃習因循流弊愈深近患又生也

幽室陰々不日不月言思君子如饑如渴

嗟爾君子靡知臧否懷私之故有似充耳

並賦也靡不也充耳塞耳也謂耳聾之人

泄々八章

我艦未牢我壁未蠹將者泄々蠻方孔棘

艦之未牢猶可治之壁之未蠹猶可爲之將者泄々云如之何

積薪如陵火發于下載笑載言晏然以處

匪風飄揚匪瀾澎湃念彼神京寤歎有愾

憂思如燬其誰知之悲憤如噎其誰思之

人不我諒請勿復敢思人不我信請勿復敢悲

雖欲無思與君爲體雖欲無悲與國爲系

夏夜之短耿々如年摽擗不寐泣涕漣々

礉卦

予嘗演蠱卦。蠱卦即睽卦也。爾來竊省予所遭遇無一非睽者。亦甚奇矣。圖事揆策。而莫用其謀。睽也。竭忠盡力。而反招罪戾。睽也。言辭確寔。而不免疑猜。睽也。貲財橫散。而家道困迫。睽也。雖然物窮則變。變則通。居以正道。固無終睽之理。且天地睽。而其事同也。男女睽而其志通也。萬物睽而其事通也。處睽之世。合睽之用。亦在自強之耳。

蠱卦雖小冊。子在中。子明著大深。遂奇書自爲一。易理者。安能得。遂代理此。余嘗得。梓林氏。請開氏。不許至今。遺恨爲。

少小窮易理。中年研蠱火。融會著蠱卦。推演訓蒙者。蠱卦本是睽。乖戾諧情寡。爾來我所爲。拂亂躓而跛。憂國竭忠精。反自求飛禍。一與卦象應。或天其誠我。志因勞苦堅。行以勇決果。前脩皆如茲。猛省砥頑惰。

敬宇曰。平生得力在此。

故園

拘繫十旬心不平。秋風忽動故園情。牆陰但見狐烏影。櫳隙空望日月明。繞屋林泉何改色。傍門松菊不忘榮。水清石秀曾遊地。野鶴溪猿有舊盟。

秋思

幽室日如年。迴風揚塵埃。時節值秋晏。愁來不可排。名都何鬱々。飛閣臨通街。日夕絃歌起。音響隨風來。曲調苦且怨。沉吟激餘哀。理曲知爲誰。無廼蕩子妻。身貞反見棄。歡愛何時諧。盛年不再至。華容日益衰。意合忘情異。感同難自持。掩耳請勿聽。重聽不勝悲。

秋風

秋風淅々霜眇々。木葉辭條蘭蕙稿。日景不至廣室冥。虛櫳危檐飛塵杳。潛無鱗兮舉無翰。兀々中處將安還。

點虜

點虜先聲已得志。旌帆來去更縱横。久歎天下無豪傑。誰道胸中有甲兵。終古禁人偵彼實。連年任敵探吾情。謀猷顚倒今如此。不識何時見掃平。

今日掃平終古不可見嗚呼天道是耶非耶

漫述

雨風月如晦。頑犬吠成羣。是亦尋常事。利害何足言。

謗者任汝謗。嗤者任汝嗤。天公本知我。不覓他人知。

象山先生詩鈔卷之下

門人　信濃　北澤正誠子進編

甲寅九月得罪歸鄉。書寓居之壁

疇昔住江都。得謫旋故宅。故宅久已非。僑寓寘琴籍。庭陰悲風起。林景漸將夕。昭々秋天遠。皓々微月白。鯨鯢闚神州。東西來相迫。智者一何乏。因循情未索。伊余懷忠憤。計謀好久積。一跌若有誤。眞是不可易。壯節失其時。終身在山澤。或乘彼風雲。功名照竹册。君子何必同。趣捨動異蹟。通塞原在天。懷抱詎所惜。前途未可知。此中養遠翮。

敬宇曰讀來不覺觸動當日吾輩情緒

敬宇曰志氣遠大一跌豈其沮乎

後來發迹胚胎于此

讀洋書二首

風露已凄其。荒庭落葉積。哀鴻響遠空。寒蟀鳴高壁。我弟在都山不幸之幸

謫居中得縱讀異書是象山不幸之幸

此二首安政六年之作

又云余生洋讀學之家不能洋書有愧象山多矣

門爲市新洋籍窮格多精詣珍愛超珪璧心爲曠澹悅理將沉
潛繹日々貪新觀徂景豈足惜

秋雨變林光哀草徧池塘風物日蕭條時景似可傷謹居同嚴
隱無客闌門牆括靜久成性玄默趣偏長幽窓絺異書欲將身
世忘却愍狂馳子終歲徒倉皇

敬宇曰枕籍洋書如先生者在今日却難得也

○題那波利翁像

何國何代無英雄平生欽慕波利翁邇來杜門讀遺傳忽々不
知年歲窮撫劍仰天空慨憤世人那得察吾衷如今邊警日復
月戰船來去海西東外蕃學藝老且巧我獨遊戲等孩童守株
未知師他長矮舟誰能操元戎嗟君原是一書生苦學遂能長
明聰一朝照破當時蔽革蔽除害民情從旌旗所向如靡草威
信普加歐羅中元主西征不足道豐公北伐何得同人生得意

皇朝之併吞五大洲其在魯西亞之前乎抑後乎余范乎不能決也

多失意大雪翻手朔北風帝王事業雖未終收爲我將應有庸
世人心竅小於豆齷齪寧知英雄胸自奮能成遠大計自屈難
樹廓清功安得起君九原下同謀戮力駈奸兇終卷五洲歸皇
朝永爲五洲宗

屏居

襟懷可想是象山本領

端居無事轉無窮日攤異書觀會通宇宙之間歸掌上不知身
在小樓中

謝絶塵緣久掩關飽知人世不如閑日高睡覺未思起靜聽幽
禽語樹間

敬宇曰氣象自高詩句超凡

門徑蕭條楓葉老黃花無恙傍松閑昔日陶令今我是花前酌
酒對南山

索居秋氣到晚景起暮鴉坐惜孤缾罄更悲雙鬢華屈原吟澤

畔。賈傅謫長沙。千古不平事。醉中獨嘅嗟。
造化錫清閑。幽居尤可愛。不須拒絶嚴。自遠俗子輩。南樓放月入。好風亦自在。獨酌發微醺。身世覺殊快。

往歲藤岡勉齋。見惠盆蘭。芳意已悴。乃還其根。今年花復盛開。勉齋令人舁來。情意極渥。率然賦小詩爲謝。

有情有韻是子明本色

晨露滿秋空。林間生些涼。蘭兮尋舊盟。忽然至中堂。相顧如含笑。馥々吐幽香。三載不我遺。此情一何長。

乙卯正月杜鵑發聲

滿腹慷慨借杜鵑發聲之天覆載其可不思哉

谷口黄鸝未放聲。春城早已子規鳴。人間萬事無無兆。不是堯夫也惻情。

天保壬寅冬。啓上書先公。極陳防海利病。謂一旦欲鑄備邊之礮數千門。天下銅材有限。不若聚寺院華鐘佛具。以充其用。蓋海寇內侵。天下騷擾。靈塲實地。無獨得保全之理。收是備急。事理固宜。此其一事也。既而先公辭職。言不復行。嘉永甲寅啓得罪屏居於故里。而虜勢益熾。至於强假土地。要開互市。有志之士。誰不痛憤。忽拜去歲十二月廿三日詔書。如蟄蟲之聽雷音。喜不自禁。又思先公之不可復見。不覺感涕。率然成詩二首。

敬宇曰晉聞之山先生象山公故閣老眞田公海防盡心大小砲火學技演習先生實淵源於書公拜得此詔書偷然感涕而不懷公烏公耶

一跌歸休深鎖門。不那憂國寸心存。但欣天詔在今日。有契當年。狂妄言。

朝家預備未森嚴。孤憤空嗟歲月侵。若使先公久其位。不須今日勞宸襟。

招望月白井二子高義園賞櫻以林下敷來全似雪分韻賦詩得下字

日々醉春風廣庭櫻花下不因罪譴餘豈得任敖惰折簡招所私興懷何瀟洒對花當盡歡酒至莫辭斝春花與人生偕非永好者

敬宇曰偶然興至之言瀟洒有致

屏居二首

慮國久拮据省身却疎頑今得負罪蟄豈與世事關幽獨守孤棲且欣思念閑優游理書帙更及遠西言汎覽足珍異心目有眞歡不要學肥遯拂袖向空山

敬宇曰先生有省身之語錄省又見于詩可見平生用力大本上此領是處

幽棲似僧居遠與塵氛絕景物本蕭條況逢高秋節細泉帶雨響寒華得露發庭林無人窺山禽或一越憑欄招遠風鈎簾翫素月凡閣貯異書靜就明窓閱此事眞可欣足以忘簪笏富貴如浮雲聖言非空伐

予明嘗錄此詩見寄似今尚藏之但文字有小異同豈後來所改歟

題自畫山水

罪譴亦渥恩世事忽已違起臥一室空疎放得自怡委懷親文墨早晏他無思偶然及此戲雲山見幽姿方將消永晝何曾學畫師遣興亦一適休論妍與媸

敬宇曰何其綽々然有餘裕也

予得罪閑居一二有志之士竊來學礮兵愛予者謂宜謝生徒因賦此以示

愛者恐姑息之仁

學本期報國教亦在拯世雖潛守窮居世難情所繫志士以學來豈忍挫其銳啓發隨根器操演忘氣懈禍患有定命塞竇非所濟斯理少知者仰欽西山蔡

眞是儒者之言

是豈細人之所知也

乙卯十月初二日夜江都地大動公侯第宅市廛民居傾覆過半雲時火發數所死者無算聞而悼之長歌當哭

康回憑怒摧鼇脚混沌欲起張其背山海震盪曁大都天地有聲飛霹靂百萬人家如轉機顚覆傾搨等電擊豪華樂土成蠶

叢傑閣崇樓變瓦礫須臾擺出千埋火黑風捲煙騰碧落紫微黯黮星無光但見一道河漢赤萬家頃刻揚劫灰可憐人身非鐵石武夫勇虎竟難免況乃美人容止綽居民倉皇失東西號哭奔走如驚雀出壓不死死猛火南陌東阡骨狼藉吾聞人天無相遠合應之理不可卻天垂災祥豈徒然經傳所存太鑿々當今太政無紕繆不知此菑何由起問之蒼天天不應低頭悶々心則惡文武名士多都城都城何幸遭斯虐所識存亡果何如得信無因空戚々

又一首

君不見塞上老人善道術喪之不戚得不珍倚伏從來天所作去矣弔賀莫復陳去年忠策成泥羹逮錄無援籲蒼旻拘繫半歲獄未決都城人士憐此身一朝放還臥故山身雖小屈意頗伸古松深竹美風月相伴雙鶴情尤親圖書萬卷白日暮淺酌微吟櫻花春溪山雨後足雲煙聚遠樓中望不貧樓中月色秋殊佳黃菊丹楓隔世塵晴窓日暖宜曝背康濟眞與大古隣今年十月江門災此身却憐都城人

綱繆可想

敬宇曰有氣魄有力量非尋常嘲笑風月者所夢見

不自憐而憐人眞情藹如

暮春矚目　丙辰

櫻花三月滿皇州曉起倚樓凝遠眸欲撫獨絃歌一曲白雲散漫四山頭

敬宇曰絕句上乘

屏居三首

在世苟有酒何復問其他酣中存眞樂數酌不厭多近日貧如洗無錢送酒家靦然對虛罍瓶乎奈汝何

敬宇曰家居風景宛然在目

別墅孤城外矮樓深樹中幽蘭抽秋蕊雜華披晚風小人志屢達君子命固窮窮達兩不問雅尚託枯桐

未及龍公隱寓居近市塵囂塵起風外愁思落吟邊感鳥擇喬木羨魚潛深淵世間少于頓安得買山錢

丙辰秋有人書問礦道時予猶禁錮因有此作

三歲屏居在古城江山千里又秋聲光陰虛擲眞容惜事勢推移竊爲驚一得曾期裨國是片能亢愧占時名同人未諒平生志遠託書音問礦兵

題聚遠樓 樓在城南望月太夫別業也余得罪歸鄉乃僑居之

學竇諳世艱百憂心如擣欲罷終不能計畫碎肝腦一朝觸時網放還貧亦好僑居占勝園 園名高義內有十二勝 不受世間擾樓高山色明樹密月華宵 樓名聚遠西臨小巷東北樹竹扶疎絕無城市之氣四山屏列遠邇掩映凭欄瞻眺嵐光襲人雖足跡不出門宛如身在山林 綠沼觀游魚花林聽啼鳥歲月如擲梭時景變遷早江山秋氣入栖止人將老用舍不干我行藏各有道祇應親麴蘖陶然散懷抱

李廣

七十餘戰功亦多漢家底事極煩苛將軍一死不足惜縱收單于可奈何

賈生

時遇漢文空有才高不奈斯生長沙未到賦先就造託湘流弔屈平嘗合亦奇

經世天才不待論文章餘事亦雄渾明時無奈灌馮毀空託湘流弔屈原

大瓢歌 有人贈大瓢可容六七斗長句爲報

誰樹魏王種灌漑專畝壠西成告功形亦奇巨腹恢々脩頸聳山翁得之愛其大盛以鵝黃寘座間大盈如冲用不窮宏量無時不恬然五石未及惠施瓠風流却笑蒙叟樗一夫駕之浮江湖何若十人醉花前信山泉香酒亦冽林下市頭多醉仙只願家放不羈足以籠絡一世快甚快甚

座上客常滿。此內春酒永如泉。

河中島懷古四首

分兵謀已泄。亦不發探騎。卒然失爪牙。無奈兒郎易。
違衆納仇女。用茲終得君。箕陣報平昔。今日只荒墳。
敵情得於人。明鑒託炊煙。不進擊半渡。至今惜武仙。
於菟知詳證。甲兵殲河側。秋霧懷當日。徘徊情未極。

是詩蓋自宋末爾氏得來者。豈所夢覩哉。

望遠鏡中望月歌和阮雲臺

天體翕力自成圓。空中躍水點點皆圓。地上散汞亦然。是其翕力所自成。非由外範之也。日月諸曜。體無不圓。其理可知矣 神氣驅之相轉旋。輕者拱重本常理。何疑地月繞日天。日之質重于地三十五萬五千倍。其體大于地一百三十萬倍。月之質輕于地七十分之一。其體小于地五十分之一。今取繩一條。以其兩端連大小石。拋之於空。則大石在中旋轉。小石循而繞之。由是觀之。月之本輪。以地爲心。地及諸曜之本輪。以日爲心。無可疑者。漢人古來不識月。只道月中有仙閣。釋氏漫說閻浮樹。月中何得寫外物。阮子所論亦妄耳。暗

者非山明非水。月中無滴水。何況江湖河海。其光明之煜々者。蓋山巔耳。初月時望之。尤著矣 伏燬爲虛金石爛。但有灰燼表達裏。明暗異光。非由他。灰土之色。不同而然耳。 海涸河竭知幾日。縱有生物安得食。月中無水。故亡。論人類。雖草木蟲豸。不復生焉 月在造物已無用。惟須爲吾添秋色。海客譚天非鑿空。推算兼資窺遠筒。環山高低可指數。山間時見火光紅。泰西嘗人往々見之 月輪懸天雖似小。應隕滄海成巨島。劫數未盡三萬年。後死猶看夜月皎。兀累垢云。月輪當二萬五千年若三萬年後。漸隕于大地。赤道下洋中而成巨島。如新荷蘭土。或恐是太古天體隕地者 地月維星隸曜靈。我是主星彼附星。有人在彼望我地。不恠也成巨月形。但訝素影一處見。終古不動釘玉片。從月裏望地。懸一處而不動 中央望之我在項。如其四邊則對面。婆娑旋轉五大洲。惟恨洋中難認舟。疾風雖快不可御。地月相距。以獨乙里法度之。五萬一千八百十二里。風之疾者。一秒時間。可行一百尺。若得御此疾風。須一百三十六日而到月界 雩顥無力駕氣球。離地三百尺。大氣已至薄。故氣球之昇。以二萬一千五百四十九尺。爲最高 何人得飛入月中。夜々飽看十倍秋。凡物有徑。有闊。有面。

敬宇曰結不盡力輕妙之極

有體。未光出于面。曾紀面積雲臺多加明月秋下註。地球大于月球四倍。是以徑論光大謬矣。且謂地徑四倍于月徑。亦大略耳。如語其實。則月徑獨乙里法四百六十六里。地徑一千七百一十八里。故地輪之積。大于月輪一十六倍。而不足矣。今言十倍。亦舉其大數也。

凡事物之理。人未必識。而見有說其所以然者。亦卒視爲固然。而不復疑。如是則無益於學。故使學者先拂于心。而後渙然以氷釋。始爲有益矣。遠西窮理家。往々爲如兀累垢之言。蓋欲學者有以思。而自悟於其理也。是亦不可不知。

霧淞二首 寒夜地氣如霧凝於木上。齊人謂之霧淞。見曾子固詩註。

昨夜月寒光似霧。曉來樹上凝成花。園林初日微風動。飄滿南家又北家。

霧淞片々帶朝曦。觸竹瑽瑢到地遲。清絕風光不相遠。白櫻三月落花時。

可與南豐詩並傳矣。敬宇曰詩亦清絕

寄常山兄 丁巳

獨坐倚小樓。四面盡花木。惠風花間來。窓櫳皆奇馥。蝶影時上下。禽聲亦斷續。春酒滿在尊。却傷時景淑。非招同臭友。何以慰心曲。

敬宇曰宛然陶詩

題畫

城中沽醉眼。生花吟步蹣跚。帽子斜。山雨初晴。溪路滑。石橋殘日未歸家。

大家無所不有敬服敬服

謝澤生送櫻樹

閑居拋世事。理園散懷抱。佳人遺珍艷。賞愛過鴻寶。置鍾顧泉石。徘徊費心巧。培植終得所。似非人爲造。悅玩忘名跡。繚繞無昏曉。芳心與吾宜。將迎殊窈窕。所贈已瓊瑤。友意何以報。孤詠寫眞情。聊茲寄永好。

題上書稿

敬宇曰一片至誠可對神明

憂國憂時不恤身狂言信受上官嗔他年夷吏討遺策日本未無知計人

形容妙余亦嘗學洋砲者讀之不堪追懷

夏日即事

闐闐輷雲雷忽憶演礮時飛電日晴奪騰煙日色迷蒲萄蹴海波石榴擘洲蒼時英在下風執業相陪隨今日小樓上但看飛雲追

敬宇曰結得悠然中有無限感慨勿認做雲雷看詩○忽憶但看語上下意在言外妙甚

屏居二首

偶然睽物累薄言罷驅馳歲月隨流水鬢毛將化絲文章竟無用藝事亦何爲欲賣書與劍就僻結茅茨

唯有江湖志官情久已休寵榮同潦沫富貴等雲浮時節漸催老山川又着秋決然振衣袂何處是滄洲

同立田子存南樓觀月

南樓接高人暮色忽蒼然靈飈掃陰晴素月已高懸遠嶂含微靄長林泛薄煙隔簾弄月光銀條垂欄前時景幸如此吟矚須少延非與君對榻佳期將空還

敬宇曰晉調自高妙在筆墨之外

簾細葭所爲隔此觀月月光反射宛如銀條垂地是夜余與客始見之東坡玉塔臥微瀾千古奇語遇其境者知其形容之妙不識他日遇此境者亦有賞音於余銀條否

十月なり

聞蕃使入都丁巳九月

忽傳蕃使入都城幽憤無那雙淚生長策蒿萊久埋沒異言朝市尚縱橫小童十歲統戎教新學三年摻海兵虎狼野心非一日將迎愼莫示吾情

敬宇曰囊時幽憤與今日異今日幽憤亦獨存于識者

病中得江都信丁巳蒭月

幾年禁錮鬢如絲病臥傷心非爲私對敵得情須實索成功出

衆在先知。如何每事失機會。不及制權收便宜。愚者亦曾存一得。當將忠悃寄阿誰。

敬宇曰偶然題山水亦道及時事先生之所以爲先生在此

先知未用取人計。先知者。不可取於鬼神。不可象於事。不可驗於度。必取於人。知敵之情者也

虜使話言何得詳。勢力敵均盟可保。聲威偏重和難常。當年宋國從邦彥。今日朝廷憶李綱。非有蒼天蚤悔禍。爭由婉畫靖跳梁。

畫山水歌　丁巳蒲月

門扃深鎖如囹圄。一幅江山來何處。狂呼促童掛東廡。對之飄然欲沖舉。羣山巉巇紫翠重。樓居往々蔭長松。江流秀色可攬結。逕路屈曲足遊蹤。鄙夫平生好籌海。謀忠承譴未須悔。時勢推移不可回。隱憂百端無由解。畫中老人野鶴姿。莫是仙侶相追隨。我亦願作畫中客。漠然永與世相遺。

戊午春初密寄示諸友

忠憤之氣溢於紙表不論在鼓其論亦在鼓

負譴久杜門。雅非爲守素。坐臥愧素餐。聊自勵志趣。旦晝注洪範。竊擬萬言疏。近所著有洪範今解。專以記諷時事。獨夜繙軍書。坐使青燈曙。夷患將以膚。國步須深慮。諸友公爪牙。何視儔衆庶。壯圖非一旦。不跲在所預。協志期報國。不逮相偕助。執業如良驥。奮發思軒翥。勿復玩日月。優游鈍騁步。

聚遠樓晚望有憶江都

樓頭東望暮雲重。憶得江都春意濃。玉水晴波分市井。金城佳氣接芙蓉。滿朝文武美冠帶。列國公侯嚴服從。聞說亞人頻跋扈。誰能大義折其鋒。

戊午春悒々不樂。强作此以排悶。百年後當有知予心事者。

山靜雲常深。地靈寺更淨。春流帶煙碧。密樹含嵐暝。花外入雲

塔。林間汲谷徑。身世兩俱忘。長此散情性。

感懷

是蓋杜雲仙代彼理來時之作

東府懋文治。懷柔渥恩施。虜使覷其陰。游說轉橫恣。恐嚇假暗威。溫言雜嘲戲。詞理太矛盾。釁隙不自閟。冠帶皆仁者。輕信無他意。將許其所請。永貽民國累。修繕雖已晚。今日猶可暨。焉得智辨士。正辭挫邪志。便裝蕙船楪。徑指聖東地。虜庭論曲直。譬々明大義。伐謀揉禍患。權略庶可試。帝閽遠似天。此衷何緣致。

敬宇曰心事如青天白日千歲之下人得而見之

寄梁川公圖 戊午二月慨時事迫切破禁有此寄

愚忠見機晚。逮繫煩理官。寬典免斧鑕。舊閭得放還。五歲守斗室。伏蟄屏娛歡。有酒不敢飲。有琴不敢彈。山河又改歲。草樹漸滋蕃。幽居節物遲。春華未回喧。妖氛日以暗。殆將半乾坤。逼此隱憂辰。賴承同志援。遂構出位思。復發踰分言。感激甘罪譴。切欲通天閽。我本一丈夫。豈忘喪其元。聖明苟有裨。九死非所難。

無題三首

海外得吾師。國中足財資。只道舶不給。那知城全非。往事誰能諫。良謀貴投機。惟願中天日。大明照九圻。

已逼安危際。誰能培國脈。和親計非失。孱怯機屢錯。固國自有道。馭戎自有署。折衝存其人。豈在祿與爵。

永晝無所事。散步愛園林。新篁傳玉色。淺瀨帶琴音。功名不及立。經畫無補今。壯心未全灰。時學梁父吟。

題楠公像

傑作無毫髮遺憾是楠公小傳矣

楠公本帝賚。何必說傅說。眇軀唱大義。皇運開日月。惜無高宗賢。歲旱未醫渴。和羹失鹽梅。舟楫亦摧裂。雖知大事去。所許終不折。臨死留其子。遺戒衛帝闕。三朝扞蛇豕。正統繫一髮。終始

敬宇曰古今

題公像者多矣此詩爲壓卷

爲朝家濺盡闔門血生爲萬夫雄死爲千古烈至今金剛山行人仰巋嶪

池無名畫卷

（先集齊書錄圖越後善川上兵衛上兵衛錄の編）

寫眞山水形畫山水益見池無名之妙

山容蜿蜒谷盤紆雲水飛動目欲瞿巖古松秀不知歲樓臺縹緲開靈區憶昔倦遊歸信中中路回頭望雲衢雲橫煙度山聯綿飯顆大門勢奔趨春晚將雨天氣暖疊層紫翠易模糊乍從雲際認峯巒飄忽出有復入無有無變幻不可究恍若海上隔霞望蓬壺今披此圖酷相似心匠能與造物俱此老天機不易到信知名士無虛譽當年若使髯蘇見此卷未必獨題王郎烟江疊嶂圖

己未新年

雪留尼嚴嶺春到海津城畫船卜吉夢短管學鶯聲屠蘇朝共醉鼓笛夜同鳴寧識五畿外海隅觸駭鯨

（夏月池山無水名畫見此詩便得無是仙口吻矣）

（不必使無是坡）

（敬宇題雅畫詩可得曰稱先生大雙）

屏居二首

邱園久不除有如古樵路幽花鎭餘春深樹早成暮智巧固不足退省齊老圃雖非潘安仁欲作閑居賦

（敬宇曰道學者之言）

人厭幽居陋吾愛閑中味客稀犬鎭眠林靜鳥常至新詩陶性靈晚酌養和氣世理自有限過足非所貴

樓居

（敬宇曰愚亦有東西書堆積滿架而奔走風塵不能抽讀汎覽何日得似先生樓居之興乎）

樓居避卑喧邈然脫世裝對山愛晨旭看雲屬殘陽微雨從風過櫻葉送古香歡焉命小酌舉盃酒亦芳我有東西書堆積滿篋牀歐羅窮實際赤縣美文章隨意時抽讀汎覽殊未忙惟此未忙際深味意難忘

題畫

金元人佳境眞是題畫詩

山雲簇々水潺々溪樹秋深紅欲然獨往拾芝人未返夕陽已在石橋邊

敬宇曰杜陵醉時歌不免貧富比較之意把杯自遣之裡胸容容乾坤却此中象大海氣不是江乾

醉時歌

人欲加害己有取少々害患心太苦吾無有取横羅寃竄謫刀鋸衷亦安陽明山人明快士瘴毒魍魎一齊看曾作書報毛憲副言辭侃々不可干屏居二月梅初發對花斟酒與不竭醉把王文讀一過白日曈曨天地闊

觀雨

雷雨動西山亂雲趂風飜閑坐望天澤須臾滿郊園始微如浥塵漸進似傾盆白煙翳林薄密霧迷山根空濛竟無際忽驚眼界寬涼氣集葛帔灑然解襟煩憶在江門日海樓坐黃昏

觀大槐士廣畫山水戲題一詩

讀至此詩殆不堪今昔之感

幽寂溪邊亭蒼翠亭側樹雨歇瀑初明壁寒雲猶附弄水塵累遠聽禽清景暮誰意都城人解此林壑趣

余罪大責輕念咎之餘又復何言然其爲況也如此視之於士廣雖能解林壑之趣而占居城市未免奔走乎紅塵青壒之中孰輸孰贏世當有辨之者

偶成

造化推移春復秋此心常與古人遊前身應是華陽老萬卷詩書不下樓

坡公翻案發龍蓋夫子自道也

殷殷闐闐在遠空密雲不雨日沈紅雷公有意蘇天下只向山中起蟄龍

無題二首

敬宇曰借問

神州皇極崇民德古今同借問權謀雜何如信義隆深修辭命

待。莫恤梯航通。切願明王道。遠傳蕩蕩風。

度德未量力。大動何所成。同謀及卜筮。夬履戒堅貞。請用名言（據謀雜何如信義、壁字、義當路者十宜書諸紳萬國交際公法之要旨此二句盡之矣）

正。莫令變亂生。不過汎收長。侔物乃兵經。

庚申新年（正月十二日幕府使節始航米利堅）

四海無波久太平。遠蕃土物賀新正。後人應紀今時盛。漢武周宣未足名。（二首蓋反言以寄感慨耳）

講武修文世有賢。王猷無外見今年。洋帆能載使人去。閑却前頭日本船。（敬宇曰閑却者豈獨船乎哉不堪慨歎）

屏居二首

無事樂清虛。陋居亦不惡。藥酒四五箋。異書二三策。窓隙香煙流。座間松露滴。終日對翠屏。不美岩棲客。

藏晦應吾道。放散即天意。須飲一壺酒。以盡千日醉。長卷古人文。大筆快意字。有時成獨笑。澹然忘世事。

庚申春詠懷

自從駭鯨觸海涯。天下騷然思馳驅。我亦慷慨忘寢食。一時忠孝合清規。國恩未報虛得罪。斂翮故林棲一枝。六年辜負江都春。風景如今知何其。吾齡今歲甫五十。天命尚苦未及知。擬稱虞夏商周典。且拯戰國七雄危。大邦民物自庶富。前聖謀謨無偏私。幾時長策得施行。首出雄視臨四夷。

思友辭（友謂小林畏堂田中溫泉健美畏堂也畏堂浴健美之餘寄志）

水淺淺而微波。樹蒼蒼以始綠。思童冠之詠歸。獨悵然而遐矚。

聞白井子康浴沂之遊。竊有此寄

三村神仙窟。靈液處處瀉。（三村佐野、鞜野、田中皆有溫泉）亭潴輒成泓。盥濯鐲百痾。佳人思風詠。良辰領休暇。擁懷空悵然。不得方遊駕。

江城已夏色山郭猶春衣聞君浴沂興健羨神空馳若破岩菅雲岩菅信中高山東接上野爲我少遲遲致問山中客玉芝長幾枝予往年以公事入豬野深山拾得芝草瑩透如玉異香襲人

敬宇曰神韻悠遠

佐野名勝境積翠環清流五峯羅雲際戶隱飯繩明光黑媛班山顯氣與神謀佐野而樂溪山之勝既而得民棄地乃欲賓一矮樓名以煙嵐勝處時々遊往以爲風月主人及稍鳩工適爲事所逼遂廢然其風聲水韻未嘗一日不往來于懷也

往日愛其地有意營菟裘今我樊籠鳥因君思夢遊

窮巷

敬宇曰似老杜

窮巷守吾靜小園思澹然晚風穿竹細晨露上荷圓鯨鯉橫舟路煙塵暗日邊老夫衰無力何以正乾坤

庚申晚秋

年歲匆々徂不返又看秋景屬蕭散帝閽已遠侯門深服藥閑眠任老懶

古鐎斗引

生今世有古情抑余亦同藏如漢光武三神鏡光明天皇百眞鏡塔蹟及井六萬龜皆千年得九郎以笈上物安於起原共象山評之

我生今世有古癖愛好古玩忘饑劬惟憾力微獲不易每遭奇珍輒嗟吁歲在庚申月之除有貨鐎斗到吾廬體質渾厚神皖々縹帶雲雷相縈紆土華黯沁古色深未詳世代迷規模三足有枋流在右此制瑰奇書傳無鄭氏絕學注周官鬱人祼事彝舟儲鐎中煮鬱百廿貫停諸祭前供時需或云鐎斗盛羹湆古人行食常相須今考二說無甚遠此器制作其庶乎漢軍刀斗亦曰鐎晝炊飯食夜擊途是則名同而實異徐熊一之無乃誣流俗但識世所用睥睨古器嗤其迂此器賈低久不售我聞之直典衣沽赤縣神州數喪亂所在人食如爛魚寶鼎玉彝捐道路不異折戟委沙塗此鐎流落在何歲渡海何處免碎刳轉傳不知替幾主此日此時始遇予一朝相得喜不禁寘之几案比

敬宇曰此古鐎斗余一管以驚奇珍觀撫鐎力摸此詩極爲歎慨七寫咏歌之能事畢矣

璠璵高齋瀹茗坐清晝獨覺古光照眉鬚

庚申歲晚

孤忠不報承嚴譴歸臥家山已七年世事渾如北流水朝昏流下不曾旋

辛酉春書示諸友

邊海荐開港中原未改途兵謀渾忽畧賢路轉崎嶇深念國財乏更憂城勢孤外蕃情不測何得近天都

文久三年の作

不知統術不通夷情所以有此嘆

春日

二日三日香若煙樓前花木紅映天同棲雙鶴善行酒不用佳人舞繡筵

雙鶴字屢見子明鐘情可想敬宇曰詩亦清亮如聞鶴唳

白櫻花歌

春風幾日競繁華繞屋白櫻尤堪誇誰將三越千堆雪剪作吾家滿眼花主人盡日看不足移席把酒待嫦娥座中終乏豪翰客亦能引杯自爲歌一朝海天風氣惡海面黯慘卷白波蛟鼉出沒神龍怒盪激聲勢及山阿曲突徙薪屢盡言舍而不錄自古多平生雖亦不我臧同仇何敢忘修戈櫻花無情似有情向我慘澹如含嗟時危未知稅駕處今我不飲奈花何

屏居

狂迂不欲受人憐擬託滄州送暮年懶習本從文賦逸余多不留詩文稿浮生何索姓名傳花前得伴朝開酒竹裏無人夜撫絃世念消磨今已久只愁未辨買山錢

題畫

癸亥虞夏題盤谷畫

清樾垂蔭幽澗激流懷彼呦鹿邀此良儔溪雲靄靄松風颼颼山中無暑盛夏如秋有琴橫牀有酒盈卣一觴一詠其他奚求

有聲無聲兼琴並至眞筒畫中之畫

藤房卿兜髮改作陶朱公泛湖引貴支那典故

有　歎

不可諫者昨日之事害已成不可測者今日之勢心更驚陸有豺狼水有鱷攙槍熒惑照天赤陵犯成風多驕恣天下名言倒且錯肉食失計但竊位藿食寧不腦塗地大厦將傾非所支明者祇應尚其必我既不能學伍子胥抉眼懸城門又不欲藤房卿髡髮逐水雲只願得似武陵桃源處肥遯高隱世上榮枯盛衰永不聞

忠愛之情溢于紙表

送小林畏堂赴東府

山城雖有雨秋熱殊未平在家猶煩鬱況子東都行此行豈得辭藩邸少經生祇恨官依舊又愁囊不盈所願戒詭遇範我振清聲古人難晚節送君一片情

僕負罪屏居禁絕外交荒廢筆研非由老兄告別豈敢作詩

敬宇曰距今二十年前耳當時抱此識見者不遇于世而落以其死而有功誰知乎今日陰乎

此詩只可令洒侯一閱慎勿視餘人也

讀洋書二首

五洲彼是有吾師擇善從之何復疑偏見未除窮措大自求其穴比螻蟻

鉤深須是工夫實務博莫如懷抱虛宋代若能通海舶張朱不棄遠西書

壬戌春

敬宇曰流麗可誦

不須門外去看花日日樓頭醉絳霞應與蝶蜂緣不淺春光深處是吾家

○恭聞所作櫻賦蒙天覽不勝榮幸慶喜之至爲五絕句

敬宇曰四夫著作蒙天覽田者前有佐川國歌後有先生此賦三百年間唯二人可謂無上之榮

居然山澤一腐儒廢錮九年形迹孤多謝三春白櫻樹微言因汝達天都

一篇賦就入天墀。想見君王帶笑披。曾用顏家田舍樣。禿毫縱意寫纖詞。

自嘲自慰妙

細賦櫻花日易消。多年蟄居太無聊。天顏應笑非壯士。篆刻彫蟲學六朝。

櫻花頌上紫雲霄。榮幸何人能得超。皇國他年有蕭統。選中亦自不寒寥。

親舊相傳亦喜欣。前來向我慇懃云。陪臣詞筆膺天覽。昌後後塵今有君。

再賦長句

相如絕藝莫能追。希逸惠連庶可爲。嘗學六朝作櫻賦。孰知託興在湘纍。湘纍當年頌橘樹。自喻志節不容移。文章爛煥類有道。紛縕修姱足可師。我致忠悃遇嚴譴。幽囚廢錮九年茲。憂憤空效長沙哭。感觸終懷郢路悲。我賦一旦生翼飛。微志因之辱天知。絕似櫻花在窮谷。天光漏處照春熙。

屏居二首

幾年掩重門。蹉跎守側陋。松柏日成趣。蘭菊亦挺秀。不友古人心。終與誰同眞。賴有滿架書。披閱永昏晝。

閑居白日悠。周覽足圖籍。況茲長夏時。薰風吹幽籜。獨坐興方澹。默玩理弗隔。陶然酌一盃。更應山景夕。

有感

敬宇曰一氣呵成絕不費力是爲眞詩

慨然發憤冒艱險。擬爲皇州紓大患。豈料數奇不酬志。九年寂莫臥家山。

無題

仙駕久不至。白日出復沉。百年能何幾。雙鬢二毛侵。感時發吝

嗟詠言撫孤琴清音和天籟遺響滿空林纏牽非可慕人生貴快心劉伶甘麴糵向秀探道深顯達又何爲吾志在雲岑

余以嘉永甲寅歲獲罪自江都歸松代伏蟄九年以文久壬戌冬蒙宥今茲癸亥與老友竹村春沙出遊得小詩數首

家山又復伴春沙鞍上看春日欲斜記起墨堤殘月曙雙雙並馬入櫻花

老夫漫學少年場鞭袖偏能惹興長駿馬還須行慢慢路傍花木正飛香

整整斜斜皆有態寒林忽變萬花叢煙消巧吐山前雪日出未隨溪上風

不干

不干譽命不避毀窮達兩忘唯得己布衣業辱天子知何論羣蝨在褌裏玉壺美酒琥珀光傾之意氣更蹶張儘從委棄塡溝壑高歌直欲排天閶

登金山（金山在松代城北山麓大鋒寺澤祖大鋒公嘗營菟裘處）

北郊試遊步道傍正新樹陂陁繞寒潭攀陟循樵路奇石蹲狻猊恠松欲軒翥路盡望川原萬景在指顧云是太公時憩歇結舍處懷古欽英風徘徊不能去

閑居二首

吾家老柳樹亭亭車蓋如不問出宰相只欣宜隱居青眼向日開絲髮受風梳尤愛盛夏夕翠映讀殘書

庭樹帶涼飈虛窓深且閑故人在天涯異書惜獨看萬化呈其竅六合掛睫端欲沈無影響援翰寄所歎

（故人黑川良庵也）

余以甲寅秋得嚴譴歸藩託琴於澁谷洒侯後九年蒙恩宥洒侯四詩代簡郵傳見還意甚殷卒爾攀和兩篇聊布謝悃

託庇九年情有餘愛藏保護一同余還來絃軫皆無恙更喜瓊瑤轉粲如

一曲伊州淚萬行

與琴相別九霜經不揆今秋逢有情轉軫掃徽頻上膝琅琅可愛舊時聲

閑居

不知時事擾唯愛吾廬幽況此新秋夕河漢澄欲流林靜涼侵席夜深月近樓晚飲酒未醒高吟獨自酬

疎雨散幽居庭陰坐爽颯方沼生圓文靜林見動葉車馬無還往柴門晝空闔方耽沖澹趣豈許塵慮雜

敬宇曰方圓靜動用得妙

題伯顏像　癸亥秋應召赴京師忽忙中觀此圖輒題

善斷善謀子明即其人也惜禍不能卒其奇命於阨雄略可勝慨嘆哉

善斷善謀無失計萬千將士仰如神即今天下遭多難苦憶當年雄略人

馬上雜詩二首

亦可以見文武之才矣敬宇曰先生騎馬狀態紙上躍躍乎出

終日馳驅城北原秋風嫋嫋吹垂鞬外觀應有畫圖趣駐馬夕陽黃葉村

騰騰快馬洋裝輕信馬離城不計程背日林間革轡輭逐風堤上鐵蹄鳴

偶成

閑中今古感興衰能變危機誰所期十載閉門讀書味世間唯有夜燈知

甲子春初馬上所得

詩稿

詩鈔に漏れたる詩を收む、編次に順序なし

閑來跨馬出看花。遲日猶嫌晷易過。不是盧陵歐太守。果然鞍上得詩多。

敬宇曰取其襟懷

只愛驪駒白玉珂。自捧人棄暇常多。朝朝日上揮鞭出。城市塵埃奈我何。

無題

屏居情況可想可憐

身是華陽陶通明。日日樓上聽松聲。夢中常有遊仙興。鸞背吹笙向玉京。

敬宇曰是集以東都詩以赴京師爲始以赴京師爲終生出處自有照應而詩亦然從之似非偶

三月奉命赴京師途中櫻花盛開

此行好時節。似踐觀花約。晴馬既可人。雨轎亦不惡。不探沿道勝。素志竟難酬。何日了公幹。歸路耽壑丘。已無棧道險。誰謂岐岨難。馬背吟眸遠。轎窓靠睡安。一川束萬水。孤道繞千巒。林壑多奇勝。只恨日易殘。

何日了公幹歸路耽壑丘子明不能遂此志更物數二句盡岐路

甲午元旦。讀易謾言。因一齋先生韻。增以二。一齋先生。齡躋六十有三。

繙易迎升日。養蒙佔畢呻。天心隨浩々。生意漸津々。閉蟄方成解。勾萌初出屯。肥殺儐小畜。芳醇速同人。風物看咸朗。雲容望益新。歡聲磬鼎沸。朝市兆豐春。一齋先生原韻曰。東軒朝讀易。讀罷一唫呻。雪砌冰初渙。煙庭草發屯。齡今丁既濟。歡舊對家人。腔子須頤養。乾元不老春。

丙申初夏。竹庵師許始見林君大輝。大輝延余到其堂。誼如舊知。及夜八木上野高瀨絲我諸君。相尋而來。其樂不可言。乃賦詩記事。

竹庵訪老釋。偶然見仙官。清詩和超俊。芳茗偕甘寒。慇懃速我意。唉指碧雲端。相將欲理策。急雨瀉平原。駐策暫佇立。延致空長歎。雲霽升金堂。清凉異人寰。玉壺湛綠酒。鮮鱗盈器盤。何我藜藿暘。受此珍怪餐。矧又賓友集。道誼如金蘭。高談洩胞奇。大唉留餘歡。天色夜來

淨。月光正團々。庭樹露未晞。明珠麗葉間。更深景倍奇。豪興豈易闌。
所恨世絆緊。明朝拂歸鞍。

賛文晁富士畫

便駭單身在碧穹。繚青紫白望成空。金城丹闕知何處。揮袖將乘萬
里風。　天保丁酉春季爲關子恒象山平啓題

○

丁未仲冬

龜叟嗜茶知水脉。手穿巖井向人誇。何時去坐六藏窟。共吹爐煙啜
乳華。予時久寓于江戸之玉池

杳野村溫泉。謝佛巖禪師見惠蕎麪。

點塵不雜白如雪。條理無紊細似鬚。日暮湯泉浴盥後。滿盤清味換
風于。

擬古

我昔在名山。學仙巖穴間。精修絕華念。冥寂味幽玄。偶逢方瞳叟。長
跪授靈編。恍惚與之去。躡虛朝帝先。青童奏笙樂。雲旗導吾前。鸞鶴
隨上下。玉佩鳴珊々。俯首睨下方。九區小似拳。俗子營名利。其中事
周旋。顧之乃一咲。高厲摩黔天。何意一失足。忽墮世網艱。樊籠殊牢
固。羈絆又拘牽。志願久不申。五內徒憔煎。白日出復沒。苒々頹紅顏。
擧入紫煙。

花發多風雨

誰言花發多風雨。風雨多時花正開。風雨中間花更好。好花風雨起
予來。

哭林大輝　〃

沈痛欲慟哭。雙淚潸難歛。借問胡爲然。悼人在思念。相識三十年。交

安政四年

情素雅澹。歲時相經過。要約亦不汎。平生談理妙。永訣何攸占。不意所然諾。竟爲延陵劍。至誠無幽明。弱翰今苟蘸。逝者若有知。此情庶无忝。

嘉永元年

采芝歌并引

嘉永元年夏。巡行鞜野深山。山間得一草。長七寸許。一莖六枝。枝開一華。宛然幽蘭。惟無葉爲異耳。枝莖淺紅。華色淡紫。皆玲瓏如玉。香氣清絕。不可名狀。遠聞于數步外。問其名無能識者。按說文。芝古字之。以象其形。則其一莖數枝之狀可見矣。傳云。芝蘭之室。以與蘭並稱。則其爲香草明矣。又記陸子靜書其玉芝歌後云。成花如蘭。今皆相符。則爲眞芝草無疑也。作采芝歌。

山高兮谷盤。憺余忘兮反旋。蔭松柏兮偃蹇。嗽石泉兮潺湲。覯神草兮嵓側。心浩蕩兮愉懌。瑤華兮氷蘂。玉稊兮瓊枝。女何爲兮山阿。芳郁々兮襲台。搴夫英兮爲佩。將以遺兮所思。路險難兮悠々。聊被服兮翺遊。

題山水圖

江澄山亦淨。可以澹沖襟。泉源通絕谷。石徑入寒林。應有塵外客。携手共幽尋。

白井子康。見寄庭榎所生黃蕈。食之有仙味。率易賦詩。聊表謝憶。

氣和擢紫莖。玉色照階庭。道人采以贈。殊愜物外情。潔性與吾宜。幽獎啜香羹。未論換凡骨。且覺襟懷靈。詩律生神韻。酒味更冽清。笑他世上人。貪饕逐穢腥。

和人放懷

爲人雖未有前知。富貴功名豈力爲。滌蕩襟懷須是酒。優游情思莫

如詩。況當水竹雲山地。忍負風花雪月期。男子雄圖存用舍。不開眉笑待何時。

項羽

七十餘戰終敗北。果然鬪智勝鬪力。此意重瞳恨不知。當初只學萬人敵。

賀墨坂大夫丸山君六十三初度

忽聞□際紫芝香。復見雲間白鶴翔。高閣笙歌奏仙樂。滿堂賀客薦霞觴。蓬萊闕下無春盡。函谷關中覺日長。從是先生積壽子。洋々海上認塵揚。

別高田仁兄

此別何須嗟。我行亦不遠。灝堤花盛期。同遊盡醉返。

○

江廣夜色靜。月明柳陰涼。扁舟行不住。棹影搖空蒼。

○

獨坐幽篁裏。彈琴後長嘯。深林人不知。明月來相照。

書狂雲集答山寺懼堂

多才狡黠愚群氓。爭奈通人眼若星。狗子由來無佛性。鸚哥空誦淨名經。

丁巳歲暮

屏居省譴此遲留。多病衰容易白頭。歲暮徒思天下事。夜深漫添眼前愁。虛名久竊世無補。遠畧未抒時已遒。祇合飽傾滿觴酒。酩酊日々偃空樓。

○

風光難畫種苗天。游目菅公祠廟邊。斜日已春君去後。箋頭但寫兩

三篇。

○

霜蹄踏破澗蹊青。山寺逢僧不記名。憩馬閑談忘坐久。寒林處々着鴉聲。

專精上人。見示梅花詩二十首。併近作十首。且惠一絕。輙不自揣。題評以還。又次韻見寄之什。以爲酬。

庸愚不度進評語。誰在班門堪弄斧。歎服筆端如造化。光風霽月何時腐。

滄浪啓拜具

○

堂々豪傑士。手有回天方。乘時施其技。生民解痍創。功策驚天地。又入名山藏。柳韓是何人。終世事辭章。

天保丙申二月晦。書於專精寶刹。佐久間啓。時酒數行醉書。

亡友今井子洌。病間嘗手寫陶淵明集。至初卷功成之時。謂予曰。頃來疾重。而懶于揮毫。請吾子全之。未幾而沒。今因前約謄寫補之。乃得全本。追思往事眞如一夢。感懷之餘。涕淚滿襟。慨然賦一絕。錄卷末云。

歲寒心事若爲通。金石交情一夢中。前約已成君識否。游魂何處邈無窮。

拜子洌墓

憶昨與君來此場。相携相語歎無常。如今君去我猶在。休唉丈夫霑短裳。

○

晩景蒼然烟霞籠。仙禽求宿小園中。落花和雨翩々下。廡北廡南不是風。

○

靈溪歛夕嵐。展岑出皓月。歸樵降消棧。栖翼迎林樹。此有朱沙泉。涓々瀉不竭。月光忽來臨。空潭倍清激。浴之心自廣。浩然長歌發。乘凉步巖傍。松風灑散髮。

琴　興（十五首之內五首）

乾坤生物意。草木日滋榮。一曲三彈罷。南薰吹太清。

林下鳴琴坐。風聲但自然。梢頭月方午。滴露濕吾絃。

王公如召我。爲爾理桐絲。窘促又何態。平生唉戴逵。

霜明朝氣爽。紅日照書幌。起坐試秋風。庭林墜葉響。

我琴雖然拙。亦協太古情。至人反眞意。不在指間聲。

蓮詩二首（驟括愛蓮說）　與柏屋藤助

草木花甚蕃。噫予獨愛蓮。不染乎游泥。淨植濯清漣。亭々宜遠觀。何

可褻玩焉。

不妖不枝蔓。濯々清淵中。來人愛而翫。有聞遠香通。華之君子者。衆草不可同。

庚申中元。給柏屋藤助主管紬價。近日金貨猝貴。每字號不同其賈。余以正字金。誤爲常金而支交。終不自省。主管亦似不知也。明日藤助故來還其贏餘。嗚呼世道澆漓。非一朝夕。錙銖之利。毫末之贏。詐以相欺譎。以相爭僥倖。犇趍得之而后已。天下滔々皆是也。今藤助身業商賈。而立心廉潔。不以得非義之利爲悅。必以還其贏餘而爲快。是非惟可以爲天下商賈之儀表。抑亦可以勵天下士大夫之心志。故余書此詩而遺之。蓋深嘉奬之也。象山平子明。

擬　古

細颼撼羅帷。皓月照我牀。肅々莎鷄振。嗷々哀雁翔。佳人在遠道。翹思使人傷。沉吟託古桐。調苦不能揚。歡會歎時促。離居怨夜長。漏闌不能寐。攬衣下高堂。

○

蹈險從來獨不違。積年愈信道心微。丈夫知己只天地。萬古寰中相識稀。

謝藤岡勉齋送盆蘭

幽芳楚客佩。靈姿異凡卉。碧稊抽光葉。紫莖綴玉蕊。非君分九畹。寒齋詎置此。素馨流戶牖。坐間徹香几。豫恐秋風敗。惜愛不暫弛。清晨承露華。風日避塵滓。願言全幽貞。晚節共不毀。

雜感

使節往來無絕信。生徒留學有期年。却嚴約束廣東地。不納羅斯貿易船。

詠柳眼

信國霜雪早。柳眼時見新。澤々黃金色。擘來還似銀。世人貪祿利。自道致其身。一朝臨大事。飄散隨飛塵。豈若汝弱質。歲寒能知春。

蘭

斯花有性氣。愧與凡葩群。未成君子佩。幽谷守奇芬。

無題

靜卷遺編喚酒巵。且憑曲檻撚吟髭。東山秋色美如錦。恰是西溪落照時。

自畫山水贊

年逾知命志尤堅。獨向青山更絕編。天下有山山有水。養蒙肥遯正翛然。

逸題

澹々江風動。江亭雨後天。水天忽一色。目盡萬里煙。飛禽竟不見。去帆行日邊。北渚草如織。東岸華欲燃。景物諧幽意。况已斷世緣。回眄擧太白。傾壺若流泉。乃援伯牙琴。窈眇絃新篇。遊魚如欲聽。掉尾出清漣。

中秋更級觀月。明朝歸途逢雨。二首。

昨夜山樓弄月光。今朝猶染桂華香。中途試望勝遊處。滿壑秋雲雨渺茫。

倦策歸來路未央。古村風雨暗林塘。通宵飽看名山月。此景今朝渾不妨。

逸題

秋雲易雨雁橫空。坐閱年華憶海東。演礮歸來品川路。暫時駐馬看丹楓。

天保十二年六月十三日。大朝以吾公補政。今夏久不雨。民以爲憂。是日適大雨。農商歡呼。似亦有不偶然者。喜而成詩。

嘉澤淫浸浹四隅。旱禾秀發民亦蘇。正是吾公登閣日。先看祥兆滿寰區。

○寄星巖

感激甘罪譴。欲求通天閽。聖明尙有裨。九死非所難。

○

身非眞隱愧王公。却用壯圖付世雄。霜雪貿然年紀逝。老夫祇合臥廬東。

釋氏

釋氏習寂靜。動定境自異。性靈妙明覺。通照無罣碍。可以鍊身體。可

以生神智。可以爲高人。可以爲循吏。可以爲名臣。可以守廉介。以上數句。阮元性命古訓中。論佛學文。但今槩括其兩三字。以叶韵耳。而與孔孟傳。判然殊其致。雖則殊其致。所利不可棄。王道歸皇極。敷錫詎偏陂。

釋氏之言。往々與列子合。而列子之書。又有與泰西窮理之說相符者。蓋其得於心者。有所同然不可誣矣。夫身毒與漢土。相距之遠。非如我之於泰西也。然其書。文字音讀。必累數譯而後始通。而其原書亡傳。後世不能復有所考驗。故儒者有以其言近似。而遂疑竊取莊列之說。以爲之者。至于泰西之書。今時吾輩皆知其讀法。誦說解釋。與漢籍無差異。其言々有符。歷々可證。則儒者之疑。已無所容。而心得之有同然。無分於地與時。不亦滋明白乎。因錄此詩遂及之。

天保十一年

郊行

散步愛秋晴。平郊貉遐矚。稻田已垂黃。楓塢猶雜綠。征雁聯時分。間雲斷復續。觸目理妙存。相羊悟悅足。

天保九年頃

○頭上山洩雲。脚下雲迷樹。不知春淺深。但見雲來去。是予二十八九時書也。予生三十七年。始學顏平原筆蹟。由此以前疎放自許。未及留心手學。故年垂三十。其書無法度如此。可以爲後世之戒。德成而上。藝成而下。書之美惡。固不足以輕重人。然筆札下劣。甚刺人眼。而不自省覺。亦可羞也。子弟戒之。安政戊午中冬啓又云。

富士山

芙蓉三萬六千丈。突兀上向青霄開。膚寸合雲雨天下。不道山龍施澤來。

文政己丑夏五月二十日。與宮下氏同遊石川山。以采石花。往復詩有四首。

試步半陰半霽日。田園麥色已漸黃。村童橋下追魚走。婦女桑中採

葉忙。 途中

穿石清流滾々來。遂超虎脊踏龍顎。白巖削作芙蓉狀。萬古千秋天外開。 石川山

陟彼西山采石花。溫光映日轉婆娑。幽溪深鎖隔人世。欲遇仙翁學踏霞。 仝前

會村々落夕陽微。揮袂涼風吟咏回。東北山遙如帶處。忽然兩足連天來。 歸路

○

趙高蠹呂秦。元是報讐志。所以梁閻人。終生謀宋利。

訪鳳山師途中

山遠煙村縹緲。堤平風樹離披。半晴半雨良日。非暑非寒好時。

○

過堤忽被香風吹。薰染人衣與馬衣。頓轡回瞻還悅目。路傍開滿野薔薇。

雜感

永樂雖多殘俊彥。東陲却有將材存。康寧一擊火光滅。不見鯨鯢入海門。

刀槍銳利本無双。人士英靈冠萬邦。更舍私心收衆長。何方醜虜不歸降。

礮隊騎軍談握機。堅城巨艦策相依。不虛生世丈夫志。海外欲張吾國威。

偶成

琴瑟未調誰會鼓。盆瓶甃嗄不堪盛。紛々世事何時定。且可沉酣畢此生。

箇中至樂自難陳。人道即天々即人。咲殺寒巖究禪客。脫離身世枉
觀眞。

梅

氷雪堆中獨放香。窮陰無賴又何傷。野梅自有性奇僻。羞與凡花爭
俗粧。

次韻山寺君述懷之作。以送其祇役于江都。三首。

丁酉か

聞昔昭王當位年。能聽買骨務招賢。如今聰睿踐其跡。豈在成功獨
不然。

古來卓識世間稀。惟在高明能察微。莅事當任宜盡分。何於得喪與
譽誹。

俊傑拔群謀事時。小人常態多驚疑。請君去日休憂念。內積精誠誰
不移。

七月既望。同山寺常山寺內松濤二兄。恩田君東園觀月。次
常山兄韻。其一

園濶秋夜靜。石樹疏數工。水光倏閃爍。月昇斗牛東。蔬卉明露華。樹
陰唯秋風。緬想赤壁興。喟然歎蘇公。世人無眞識。動輒侮豪雄。有賢
不知尊。無乃是盲聾。我儕學道者。宜不此輩同。慷慨劇談久。天際月
既中。

其二

名園誰經營。自然類化工。小丘分溪水。清流遶西東。涉流踏明月。踞
石嘯清風。既有玆風月。況見吾二公。胸襟頗明快。談笑亦俊雄。洗杯
相酬酢。高歌駭頑聾。因歎無盡藏。千載受用同。酣樂非荒宴。道眞在
斯中。

送世子傅。不息山寺君。

天保丙申山寺常山爲守役此詩疑整丁酉

往我作直卦。勸君建本根。微忠全在此。此外更何言。

屏居

演礇花間彼一時。新花歷亂碎瓊蕤。如今閑臥幽林下。獨對殘紅愁細颸。

○

碧水澄吾神。青林澹吾慮。養拙三五年。滋覺世事遽。時風悅軟熟。物情重琛賂。辱寵復奚思。塊然守樸素。

○

夾路櫻花發近人。趁晴馱馬驕嘶春。奔馳偶與飄風會。撲面飛紅與更新。

雜感 壬子晚春

女戎一怒不徒已。萬足破波東海東。愧殺書生無氣骨。優游猶自學雕蟲。

○

秋樓獨酌臉潮紅。醉倚欄干明月中。夜氣侵人儘能耐。不須更服玉屏風。

放歌行

嗚呼先公不可見。良忠大夫逐飛電。救時長策誰能聽。恨殺萬里浮雲編。國賊不恤國臧否。小兒但覓栗與榴。我憑屋柱歌此曲。閭門爲之顏色憂。

○

山麓幽清宜養眞。柴門不鎖沒塵侵。方池一片長松下。澈碧空明見此心。

○

身作男兒着盛服。何堪陰險欺幽獨。從他世上奸屠家。每挂羊頭鬻狗肉。

題畫山水

山容如太古。水態世情非。疎林映脩竹。細草覆荒磯。孤亭長不鎖。苔徑人蹤稀。珍重倪高士。千載尙未歸。

秋月揚明揮

暮天綠煙盡。秋水白波生。圓影當中空。物象皆露呈。山河屢改變。人世幾枯榮。對景終遙夕。悠々萬古情。

○

青衣紺幗剪裁新。巧扮群猴做美人。可惡申韓斯鞅術。暮三朝四狙天民。

○

濃淡雲烟山腹橫。疑風雨至一溪聲。禿毫寫得董家法。胸裏峰巒未必名。

東山觀桃花次宮下兄韻

東山處々桃流芳。遠近紅霞遮日長。此日初來探勝客。徘徊猶自欲忘鄉。

○

陋巷寒溪側。雙松窮士家。門荒埋薜荔。階古長蒹葭。利勢非所願。才能何足誇。好傾一瓢酒。恣意聽鳴蛙。

天保癸卯夏日錄供君毅仁兄粲正

美哉鄧林樹。蒼翠若濯淨。非云無枯枝。只是不足病。

移梅

仙人修法鍊丹砂。飛着枝頭爲風凝。一根移去書房邊。欲假清香助

雅興。

卜居五吟 己亥晩夏

辭里來江都。卜棲玉池沚。池水宜鑒形。嘉木堪可倚。昔人居洛邑。擬觀天下士。方今襲前躅。良朋肯枉趾。

幽居有五柳。酷似陶令貧。詩聊宣浩志。酒厘發情眞。陋劣儒生業。飄蕭客子身。所思猶在世。未稱葛天民。

南苑一遊涉。愛茲高柳陰。廻風舞藻荇。蕭颯似秋深。放懷隨所適。發興命孤琴。鍾子知何許。山水有清音。

晨起嗽寒井。高齋理遺經。爲由沖襟爽。轉覺外務輕。陋矣溺訓詁。鄙哉託利名。吾道極于天。近小非所寧。

倦來抛書帙。物理靜此窮。游魚自潑剌。啼鳥亦沖融。欄角嘯梧月。庭陰吟柳風。世無邵夫子。茲懷誰與同。

○

偶然罷驅馳。歸臥守側陋。松柏日成趣。蘭菊亦挺秀。非友古人心。終與誰同臭。賴有萬架書。披閱永昏晝。

沛雨

黑雲壓奪遠山黛。虩々震來風雨溉。綠荷搖動似驚波。萬顆明珠一時碎。

賀大川大人之八十八

有松在南嶺。千年翠露濃。持以爲翁壽。願翁如此松。

○

千枝萬朶花如綴。曉露重時尤艷絕。芳意將闌風入林。青天白日漲紅雪。

○

不取容當世。情思少所親。彭澤去已久。安得素心人。把盃聊自適。陶然永宵晨。

路傍花木正飛香
墨堤春色難徒過。江月驪駒今若何。遙想鐵蹄高響處。花間鞭影落晴波。

屏居

消遣閑愁存底物。杏村新釀兩三巵。春朝雨過江山麗。還把離騷獨自披。

賦得松間明月

老松蟠屈躍蛇龍。半夜葉間光忽瞳。一曲玉鎌新下礪。直尋好朶賁籐櫳。

戊申新年作 客歲辭免郡監 嘉永年間關慎九郎に書して與へたりと云

罷休不受當時責。嘯月眠花得便宜。況復太平開歲首。金樽倒盡在茲時。

幽居

楮杉松柏綠重々。更有流泉鳴屋東。世上熱官偵不得。幽栖六月已秋風。

屏居

屏居自無事。涉園西復東。遊禽狎不驚。花草時改容。倚林送落照。坐石待流風。鳴泉響深竹。歸雲在古松。不願人來顧。幽寂獨自供。

無事白日悠。周覽足圖籍。況茲長夏時。薰風吹幽籜。獨坐興方澹。默玩理弗隔。陶然酌一盃。更忘山景夕。

日高時鳥語。睡足始開扃。雲布魚鱗白。山連鴈齒青。獨尋芳草路。暫憩野人亭。吟策既幽夕。歸來月滿庭。

青壁掛飛泉。樹深風自冷。精舍素無塵。書帙亦齊整。凭楹誦道言。不覺夏晝永。

逢春沙話舊

多年空恨舊遊睽。逢話舊遊心不迷。墨堤連轡櫻花底。得意春風吹馬蹄。

○

曉揚鞭策到溪東。霧淞滿林花樣工。不是集英深殿舞。馬鬚也挿玉籠鬆。

題山水畫

兩株煙柳拂彎橋。一幔風樓倚翠翹。如帶青山長十里。依稀刷入尺餘綃。

石坂眞龍宅宴

廣宅膏腴地。主人鄉曲豪。招邀忘路遠。歡待愛情高。短匙排文玉。豐餚等太牢。老饞貪俊味。更喜飫兒曹。

○

四月清明小雨過。山頭水色薄於羅。也是一年佳氣候。却勝花時寒意多。

○

獨往討幽寂。風露凄將寒。古道一亭靜。亂山千樹殷。勝踐興未盡。雲歸夕陽殘。

○

滄海翻波起伏龍。飛騰倏忽過芙蓉。沛然下雨物皆息。雨霽雲收無跡蹤。

○

物去無追著。體舒心自閑。嘯風々洒々。吟月々團々。坐臥齋房裡。逍遙天地間。何須求大藥。辛苦入仙山。

弘化元年

讀洋書

壯年貴苦學。博涉宜無常。旁執西洋書。日々課數章。太易本無體。至神豈有方。新舊互相發。斯理生輝光。心解眞河決。沛然誰禦防。惜無宋明賢。與入此室堂。

踐約棲鸞堂看花。此日有雨。不辭泥濘沒遊屐。來倚故家南面楹。賞花不必在晴日。雨々風々也有情。

○

雨祠々畔雨廉纖。暫立溪頭側帽檐。記得勝遊時一笑。杏花村裡舊青帘。

間居

築室窮巷曲。環堵別四隣。石湍激庭除。青山當承塵。花木棲啼鳥。荒砌苔敷茵。對之酌春醑。衎々樂志神。我觀驟風雨。莫能終日辰。彼蒼猶如是。況乎此生民。榮利非可恃。至道貴安身。取轍彭與老。恬漠養吾眞。

題畫

欲託守微痾。永釋塵累紛。水閣閟林扃。靜披玉笈文。山中新雨足。林外夕陽曛。多謝同道友。跫然破溪雲。

梅

吐花瘦骨見精神。磅礴清香尤絕倫。應爲孤標能耐冷。不儔桃李獨先春。

次春沙兄寄題之韻

屏居寂々世緣輕。過客蹤稀忘近城。只愛環樓松籟外。通池曲水有琴聲。

馬上雜興

青驄尾醮碧溪水。石瀨磷々淺且長。飽飲中流徐上岸。柳陰又得幾時涼。

白馬歌

有馬有馬名曰開。卓然獨在南山隈。世間駑馬何齊足。追風越景勝方才。金鞍玉珂雖不飾。雄氣猛志能可逼。平生守節不涴泥。美質瑩々如玉色。思致修名千里身。伯樂未知慵仰鳴。一朝所擇從奴隸。滿懷怏氣紛相生。直士忠臣不見用。諂諛愚戇多受俸。古往今來人所知。時乎命乎道何壅。英雄和漢幾百千。能天能人纔以傳。今時侘傺堪酸鼻。良馬俊駒亦復然。退之爲說義眞是。豐藻卓論皆緣此。茫荒天下無馬耶。總在伯樂不知只。日々低耳着鹽車。自掩才力徒嘆嗟。竊恐群馬相嫉妬。荃亦信讒而有他。伯樂一相若使進。蹴裂堅氷超巖峻。更得王良造父操。山河千里唯一瞬。

○

曉風吹曲沼。秋水起微波。芙蓉非難折。零露奈多何。

挽金子生（金子重輔。澁木松太郎之本名也。）

金生忠義志。飜遭盛世棄。我亦斯人徒。命乎可安義。脫繫各東西。心期勵初志。利器修且藏。蠖屈待時至。如何不秀苗。中路零其翠。歔欷豈獨今。百世足悲淚。

東遊途上轎中口吟　信狂

月出轎窓前。眠醒轎窓裏。轎窓似齋窓。但少梅影耳。

示諸生

南金逾鍊色逾鮮。人亦如之敢不研。搬水拆薪皆實學。工夫不必在陳編。

寒夜

宿鳥如驚夜數鳴。黃綢衾薄睡難成。林居將曉凌競甚。屋外時聞樹裂聲。

○

幽獨坐小樓。四面盡花木。和風出林來。窗櫳蒙芬馥。蝶影時上下。禽聲復斷續。春酒空盈尊。飜傷時景淑。非招同臭友。何以慰心曲。

冬嶺秀孤松

老幹倚崇嶺。勢如翠鳳翔。晴陰自茀蔚。風韻復蕭騷。地位元不卑。雪中氣更豪。非歷苦寒境。詎知勁節高。

夏日偶成

涼飈吹高柳。策々入疎簾。幽人覺午夢。起坐理牙籤。氣冲眼自明。形忘神亦恬。大道未庶幾。利聲已久厭。時景愜茲情。衆理足沉潛。悠々此中意。俗子未易覘。

○

庭陰風露交。砌竹忽鳴秋。盃酒陶令夕。明朝非所憂。琅然戛寒玉。逸想不可留。

留別靜山龍田君

風晨月夕共唫哦。行樂不論年歲差。他日欲忘々叵得。東山溪泮賞桃華。

○

見月眞言々不空。圓明何處不圓通。塵根心法都無物。妙用方知與物同。

觀水道人

石龜歌。奉賀赤澤先生八十之誕辰。

天保十年正月

清江使者身半丈。三百甲蟲推獨長。七十二鑽無遺策。刳腸留骨不足奬。

赤澤先生通稱多仲

赤澤先生學無爲。冥契獨獲石腸兒。背上丘山無斧痕。天成列宿法象垂。惠迪得吉惠逆凶。蘊燋何强問安危。不解張口呑空氣。無爲恬靜長不飢。

先生法之工夫細。行年八十貌類穉。煉形往應如此石。久視千歲亦容易。

天保十年己亥正月象山平啓頓首

○

楓葉秋高愁客情。吳江楚岸不留靑。幽人却愛晴霜曉。林下無風紅滿庭。

○

禪林終日雨蕭々。何事落花如雪飄。新樹林間老鶯語。蛙聲相和似吹笙。

夾竹桃

時雨生凉秋意饒。庭階風樹日蕭騷。蕙蘭已謝木犀晚。夾竹桃香韻獨高。

富嶽　萬延辛酉春三月上浣

幡幢高抽萬丈凸。下方群巒都爲坯。鎭壓皇畿冠蓬萊。衒朝紫微不班列。磊々懷襟何所容。動物蟠栖變化龍。駕雲起雨晴也晦。誠見風伯驅奇峰。顯然現出眞仙妃。莫賦嬋姸兼艶丰。縱有山神稱仙女。凌霄元爲清潔宗。若有蕪詞記漫浪。山神不許此一塲。

○

宿痾新愈心特澂。醉餘吟興晩堪乘。溪邊偶此過蕭寺。松裏不圖逢

異僧。春夜殊憐花影重。巖房最好月明昇。此情方外能無厭。他日携琴更一登。

境幽溪澱與神澂。顧眄徘徊興自乘。長嘯已驚巢上鶴。朗吟復起定中僧。雲階蘭臭隨風遠。石竇茶烟隔竹昇。半日清閑吾事足。曹溪勝地未思登。

暮春天氣亦清澂。行樂悠々風耐乘。素手浴蠶溪畔女。龐眉語客石橋僧。數峯晴日潭光動。一道花林香霧昇。忽憶山門曾結約。松間施杖更重登。

讀宋氏宇宙記

夏林昨夜雨。餘滋在園蔬。日出猶未暵。露華湛平鋪。錯落如列星。明圓似編珠。此形誰使然。能力非外驅。窺彼天體圓。始原將無殊。理妙無大小。不達竟焉如。

冬日馬上雜興二首

不須偃臥學高賢。豪興難留坐繡韉。蒼虬直入玉城去。恍覺仙門在眼前。

吟鞍極目白漫々。平野連雲千里寬。飲來已有十分酒。拂面瓊塵不甚寒。

○

君家蕎麥聞來久。瑩白映盤看欲消。誰得仙人餐玉法。寶刀斫下水精條。

○文菅相公

生前忠藎至忘軀。薨後浪遭姦禿誣。想道君靈儻有識。千年廟食不如無。

○武楠公

帝賚無慚舟楫才。用之不果亦堪哀。天王寺裡一時策。猶爲當今指未來。

○

雨後春園遍有苔。睡餘書室轉無埃。午窓起座喚新茗。林下泉聲靜自來。

偶成

緘塗一致何勞神。暑往寒來吟屈臣。徐識雷霆兼日月。世間盡是盲聾人。

戊申試筆

我有靈刀不可試。試時解斫奸邪頭。匣中重襲不曾出。紫氣猶能衝斗牛。

竹夫人

虛心守節不牽衣。暮々朝々露玉肌。酒席迎風凉更□。詩筵對月趣尤奇。床頭夏到陪君子。墻角秋來將寄誰。消長盛衰今古爾。漢宮何必一班姬。

夏日山居

麥熟山田色半黃。門前老樹欝蒼々。茅茨幽僻不知暑。甕牖清閑常送凉。日々喜看煙景好。時々笑見世人忙。此□其外聞何物。又有松風似奏簧。

○

膽形瓶子護仙粧。愛玩牀頭夢亦香。薄暮雪明窓外白。吟魂和月落滄浪。

贈平野生

本根培養豈傷枝。志氣輕浮難變基。休作紛々間說話。聖賢所貴在

眞知。

曉發

林間滴露滿人衣。澗道雲深曉更微。謝得山靈護持意。高懸明月送吾歸。

甲寅春日錄舊稿

簾幕春暄晝漏長。香絨刺出兩鴛鴦。心機元在指尖上。度與金針却不妨。

○

幽沈世味遠。泮渙道意寬。身坐小室裏。心游大虛間。已多理可玩。更有物堪觀。水飲全天樂。亦非吾所難。

讀洋書

珍木何亭亭。廼在至人囿。墜果感玄識。鬼帶始可究。茫茫天壤間。長夜開清晝。功績眞無窮。足以蓋宇宙。颶風仆蠹幹。後死恨何輶。作椅存尸祝。千載不忘舊。

題山水圖

芳春麗雲物。時禽語暄風。花林秀嶺下。畫閣衆香中。閣上盡日坐。暮色愁聞鐘。

○

蟲歌山畔雪。皚皚。一隊生徒演礮來。病懶怯寒無意出。臥聽轟擊走晴雷。

偶成

久雨初收風又狂。群鴉亂噪下橫塘。寒林蕭索無人倚。獨嗅梅花立夕陽。

癸亥春日。與友人出遊。小憩中途旗亭。

樓前繫馬酌東風何惜囊錢隨手空。不道十年復相伴。瓊盃春灩夕陽中。

天保十四年四月

經碓氷嶺

丁酉辭江都。己亥度碓嶺。嶺上望都門。目盡風煙冷。行程纔三日。相去不甚迥。恠彼勝遊處。縹緲無所領。人軀本自藐。官能多不逞。知識罹二妙。視力畧相等。好理不即實。所見意昏冥。滔々簡陋徒。終古追風影。念茲且躊躇。惕然心自警。借問經過客。何人同此省。

梅

天下第一品。含章未見珍。誰知冰雪際。已兆後年春。

蘭

雖爲衆草伍。愧與衆草友。內美竟難韜。清芬流谷口。

菊

秋色滿天地。蘭殘荷葉衰。愛茲霜下傑。晩節共心期。

○

移席久危坐。衣襟露氣濡。隱憂宵共永。幽憤月同孤。螫賊非無類。姦邪繁有徒。寄言孫寶子。鷹擊致霜誅。

無題

人壽固有終。不出百年中。伊余雖未衰。百年半已空。宜省前途促。委運任疎慵。矯々陶元亮。清節衆所崇。恥折腰小兒。解綬善處窮。果哉歸去來。千歲欽高風。

偃松歌

盤拏拔地不甚高。夭矯已亘十餘步。疑是老龍之所化。至今有時欲軒翥。礧砢多節磨銅石。秀葉葱蒨籠煙霧。海風日夕濤聲起。盛陰六月滴寒露。貞容不缺古貌深。隆冬神王凝髓素。青羊黃犬誰遇之。已

有靈珀似伏兎。神物由來無常形。樊籬隄防不可錮。我恐雷雨晦冥夜。再作眞龍冲空去。

讀管子（文政庚寅正月十四日）

二百年來遭太平。人情浮薄少忠貞。堪嗟衣食有餘者。過半不知榮辱名。

屛居

春秋冬夏林泉好。雪月花風散懷抱。率意題詩聊自娛。儘從人見笑枯槁。

○

晚起怡無務。閑吟憑艸軒。水澄魚鯉露。林靜蜻蜓翻。老懶非眞隱。拙才只憚煩。淵明解吏職。千古當同論。

冬日喜江都酒至

久不得意臥蒿萊。況遭嚴冬風雪摧。友朋咫尺絕來往。遙望江雲動遠懷。青州從事忽然至。直達齊郡何快哉。一醉春意生四體。信任高寒凍園梅。

馬上雜興

秋霜雖未上鬚眉。漸覺豐肥非昔時。醉後何須拓金戟。第應馬背弄鞭絲。

讀禪書

形跡雖似跼塵累。幸無嬰。林居宜隱淪。高樹與雲平。夏晝北窓臥。醒來非夢驚。坐閱釋氏書。亦愜寂靜情。端合息諸緣。超然了無生。

無題

綠樹青苔晝掩扃。利名場上歎無能。吟窓只愛焚香坐。自笑前身或是僧。

屏居

園林風雪響鏘鏗。晏起悠々意頗長。窮巷柴門無客叩。明窓小字試硬黃。

○

我愛幽蘭異衆芳。不將顏色媚春陽。西風寒露深林下。任是无人也自香。

夾竹桃

黛葉嫋娟輕竹翠。紅花綽約笑桃春。日中曉影挺々潔。風裡奇香細々新。

謝立田靜山見贈水葵

佳人忽有贈。蓴絲何處采。嫩芽滑不群。柔簪清無比。生啜醯已宜。澹煮鹽亦美。足跡不向門。安坐快頰齒。笑他張季鷹。命駕歸千里。

閑居

叢々金澗樹。藹々碧峰雲。月下人孤坐。風前泉遠聞。弱年好丹藥。幾歲厭塵氛。雖非食薇客。似隨麋鹿群。

感懷 癸卯

經濟本夙尚。自惜不肯輕。感時謀報國。奮衣出茅衡。拯弊豈無術。物只有誠。蕃山是何人。厮走稱其名。

危言苟見納。敢辭蹔苦辛。虛己用衆智。一方不足均。羲和曁四境。敎養普斯民。當早乞骸骨。長與風月隣。

○

幽人無所爭。散步愛園林。新篁傳玉色。淺瀨帶琴音。功名不及立。經畫無補今。壯心未全死。時學梁父吟。

淫雨

淫雨連數旬。將晴復仍舊。陸地幾生魚。蛇龍思棲囿。誰鍊五色石。仰補上天漏。白日不可見。潸然欲霑袖。

○

人馬皆肥家亦肥。更無一語及軍機。大西洋外君期否。百萬妖鯨蹴浪飛。

○

大鵬理翮徙南溟。何物鷹兒相搏掣。扶搖九萬垂天雲。碎作越山千丈雪。

○

硝磺驅邪太的端。庭前爆竹覺枯寒。吾家兼有老榴法。不用梁皇却鬼丸。

壬子歲旦戲書象山平大星

奉弔桐山老先生失令孫

夙坐桐陰聞鳳鳴。賀令孫初誕詩。嘗以鳳雛比之。孫枝底事忽凋零。哀極强要知物化。爲讀南華一卷經。

○

莎草塞門徑。無復過客跡。夏晚忽新雨。庭林溜寒液。忘世心久閑。對景情更適。誰能聽婦言。不命日暮酌。

○

雨滴梧桐秋夜長。愁心和雨到昭陽。淚痕不學君恩斷。拭却千行更萬行。

學畫蛾眉獨出群。常時人道便承恩。經年不識君王面。花落黃昏空掩門。

有人惠竹筍。燒食甚美。率然賦答

邦人不燒筍。煮食唯一途。我思玉版美。命婦理火爐。候視加謹愼。持

操存其腴。素肌脫紫綳。馨香滿屠蘇。清絕眞無比。肉味覺難俱。酒後飯亦妙。老饞進幾盂。

和杏村見示之作

樓居陶弘景。久絕往來蹤。故人適相訪。尊酒話心胸。看劍氣同壯。論詩情亦濃。興闌無絲竹。相與聽風松。

○

花木弄晴風不寒。東山秀色亦堪餐。窓間更有滿缸酒。懷抱何勞强自寬。

○

誰將巧妙筆。描此神仙窟。巖壑轟雲車。光風吹石髮。巢鶴竟無聲。嶺松常有月。石上朱衣人。千年鍊金骨。

○

青山夙所愛。看畫亦除煩。斷續雲中嶺。依微雨外邨。寒流分竹塢。古木傍柴門。酷似舊棲地。臥遊寄夢魂。

屏居

屏居無事愜疎慵。靜見雲煙變碧峰。更有適情人未識。每朝眠起日高春。

禪福寺觀牡丹

知道名花是象翁。尋香此處醉薰風。南泉化去今千歲。依舊時人似夢中。

無題 庚申八月

邈然不與世間事。只日抽毫貪著書。借問前人誰得比。茂陵閑臥病相如。

賞菊